

# ACRYLART

アクリラート別冊2015



The  
Scholar 20  
Perspective







# The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊2015





## ごあいさつ

今日の芸術、創造性の有様は、複雑化の一途をたどっています。デジタル技術が発展し、新たなメディアムを手に入れたアーチストは、あらゆるジャンルを超えて、より自由な表現を獲得するようになりました。

本奨学制度はコンテンポラリー・アートの領域で、平面・立体を問わず、色材を使用して表現を行うアーチストをその対象として、長きにわたって運営して参りました。色材を使わずとも、様々な手法で表現と向き合うことが可能となった現代にあって、ここにご紹介する20名の作家は皆、現実の支持体に対して、“昔ながらの方法”で立ち向かうことを選んでいます。昔ながらの方法とは申しましても、現代の有機化学の発展により、絵具もまた進化を続けて参りました。日々高性能になっていく顔料と展色剤を、絵具として練り上げていくためには、新しい技術、新しい発想が必要です。それらを可能にしてきたものは、我々色材メーカーの培ってきた技術力と、そして何より、その方向性を指し示す、アーチスト達の見果てぬ理想と、弛まぬ創作活動から得られる経験でした。これらが一体となって、現在でも油絵具やアクリル絵具等、様々な色材が時代とともに進化しています。芸術の世界で、色材を使用した創作活動は中心的ではあれ、その多様なジャンルの1つの形しかありません。そのなかで昔ながらの、しかし進化した色材を用い、芸術作品を作り上げる現代のアーチストは、長い芸術の歴史のなかで燐然と輝く巨匠たちの、業績の更新を試みていると言えるでしょう。

2013年に選出された、第27回ホルベイン・スカラシップが修了し、ここにその報告と記録を目的に、本誌は発行されました。奨学生の皆様には選出後1年間、50万円相当の弊社製品を提供し、微力ながら作品制作を支援して参りました。

新しい芸術の歴史の先端で活躍するアーチスト達の、その傍らで、我々も新たな歴史が紡がれていく瞬間を、目にしていきたいと願っております。

2015年7月

ホルベイン工業株式会社  
スカラシップ実行委員会



The  
Scholar 20  
Perspective

## Contents

**第28回 燿学者** (五十音順)

井上ゆかり	INOUE Yukari	12 · 34
大久保如彌	OKUBO Naomi	13 · 37
大山紗智子	OYAMA Sachico	14 · 40
小川 遥	OGAWA Haruka	15 · 43
烏山秀直	KARASUYAMA Hidetada	16 · 46
川口洋子	KAWAGUCHI Yoko	17 · 49
菊池奈緒	KIKUCHI Nao	18 · 52
黒河 希	KUROKAWA Nozomi	19 · 55
坂本夏子	SAKAMOTO Natsuko	20 · 58
柴田久美	SHIBATA Kumi	21 · 61

柴田まどか	SHIBATA Madoka	22 · 64
鈴木敦子	SUZUKI Atsuko	23 · 67
中村亮一	NAKAMURA Ryoichi	24 · 70
福田紗也佳	FUKUDA Sayaka	25 · 73
升谷真木子	MASUTANI Makiko	26 · 76
三井淑香	IMITSUI Shizuka	27 · 79
森 綾乃	MORI Ayano	28 · 82
ユアサエボシ	YUASA Eboshi	29 · 85
吉岡千尋	YOSHIOKA Chihiro	30 · 88
吉田桃子	YOSHIDA Momoko	31 · 91



The  
Scholar20  
Perspective

# Works

**第28回奨学者の作品**



井上ゆかり

造花の庭

キャンバス、油彩

130.3×162.0cm

2014年



## 大久保如彌

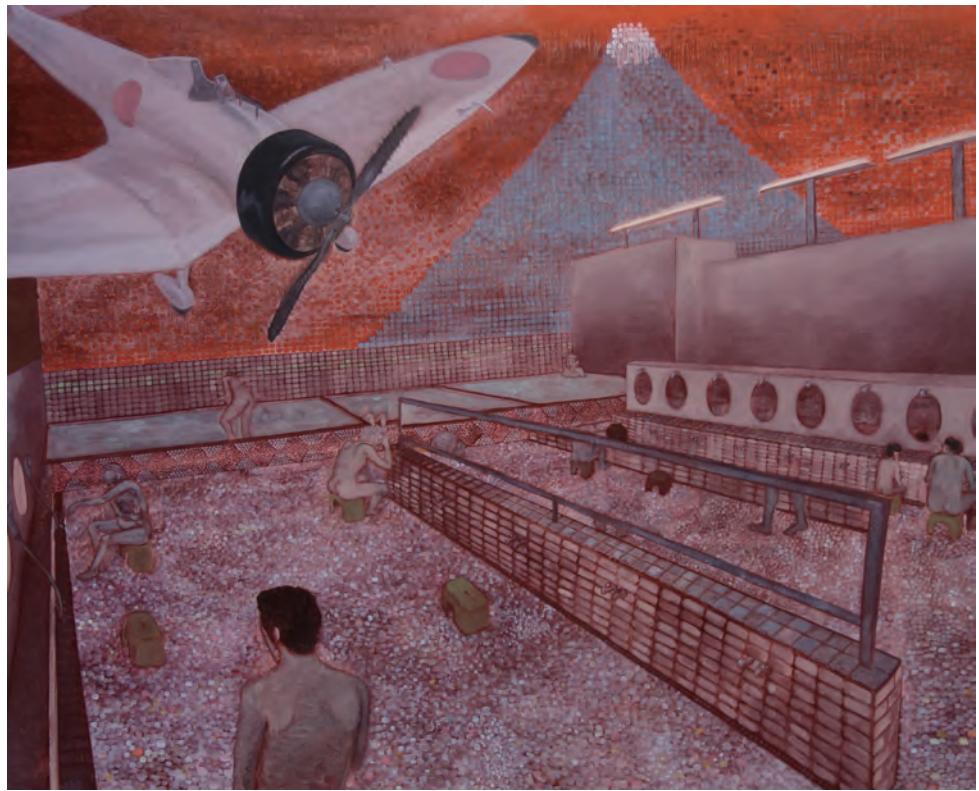
Camping-window display

パネル、綿布、アクリル絵具

116.7×91.0cm

2014年

photo by Lars Danielsson



大山紗智子

東京温泉(名古屋)

キャンバス、油彩

182.0×227.0cm

2014年



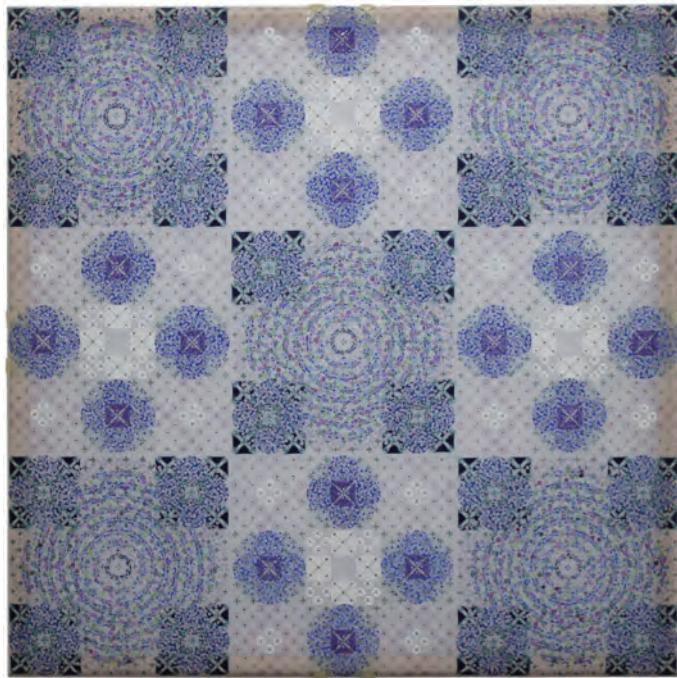
小川遙

Martha

和紙、ホログラムシート、スクリーントーン、顔料等

22.0×27.3cm

2015年



烏山秀直

振響II No.32

アクリルメディウム、顔料、水彩、色鉛筆、  
エナメル、アクリル絵具、シルクオーガンジー、木枠  
90.0×90.0cm  
2014年



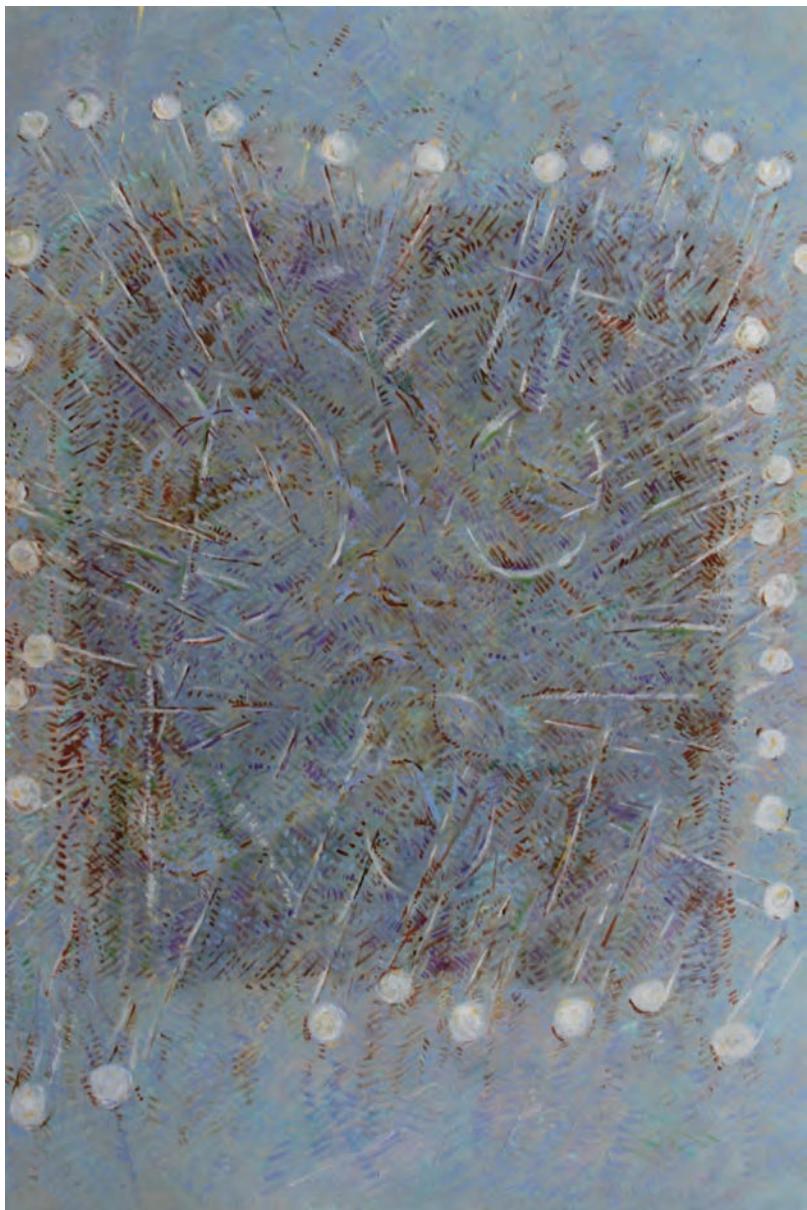
川口洋子

untitled(2014-5)

パネル、アクリル絵具、メディウム

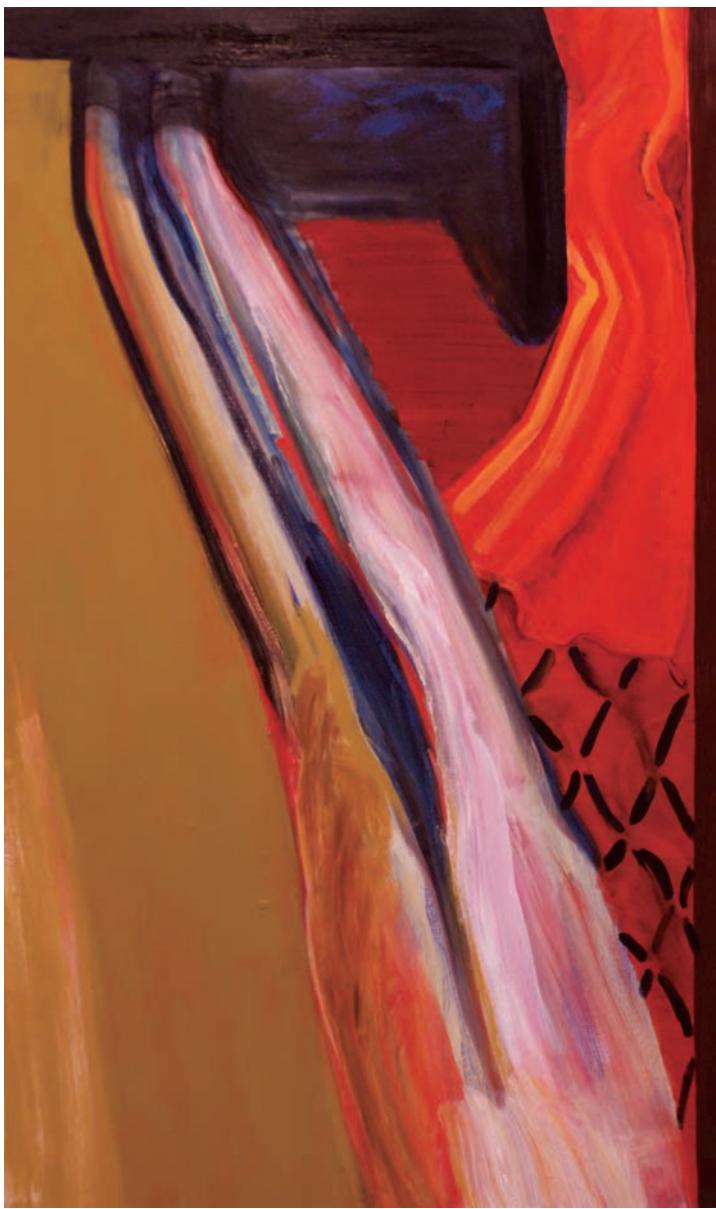
60.6×72.7cm

2014年



菊池奈緒

クラッッシュ  
キャンバス、油彩  
145.5×97.0cm  
2015年



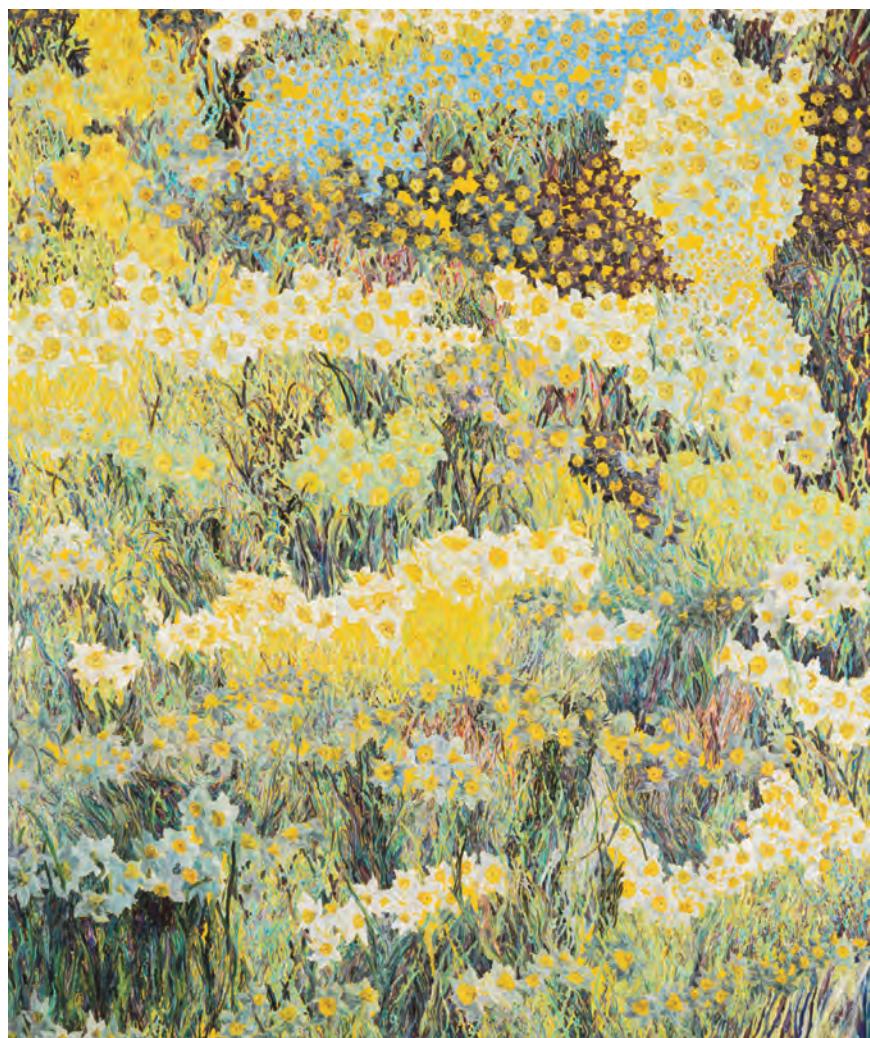
黒河希

すみか

キャンバス、油彩

162.0×97.0cm

2014年



坂本夏子

冬(水仙)

キャンバス、油彩

194.0×162.0cm

2014年



柴田久美

包まれる

キャンバス、油彩

65.0×91.0cm

2014年



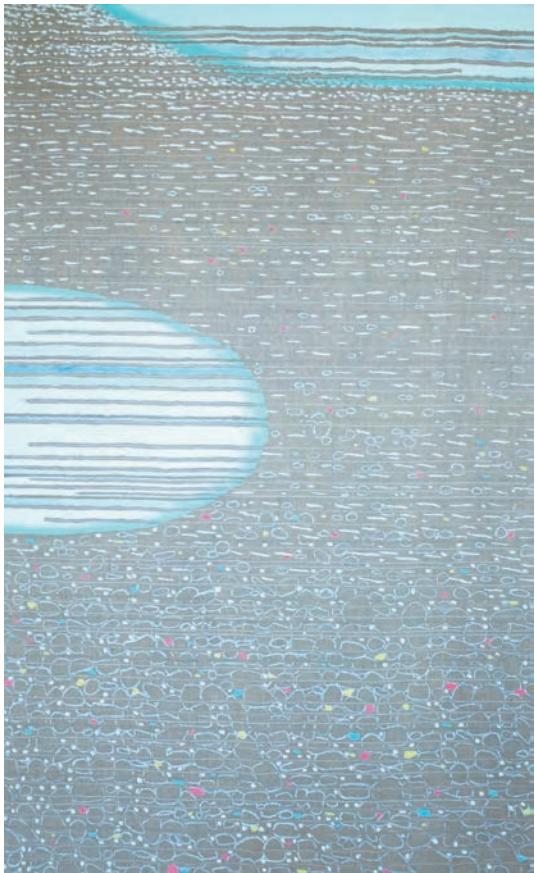
柴田まどか

うねるパターンはむらさき

キャンバス、油彩

72.7×60.6cm

2015年



鈴木敦子

川

油彩、アクリル絵具、  
ジェッソ、糸、麻布、パネル  
145.5×89.5cm  
2014年



中村亮一

From hand to hand

油彩、シナベニヤ、ポリエスチル樹脂

156.0×208.0cm

2014年



福田紗也佳

ASPM

油彩、アクリル絵具、キャンバス

72.7×91.0cm

2015年



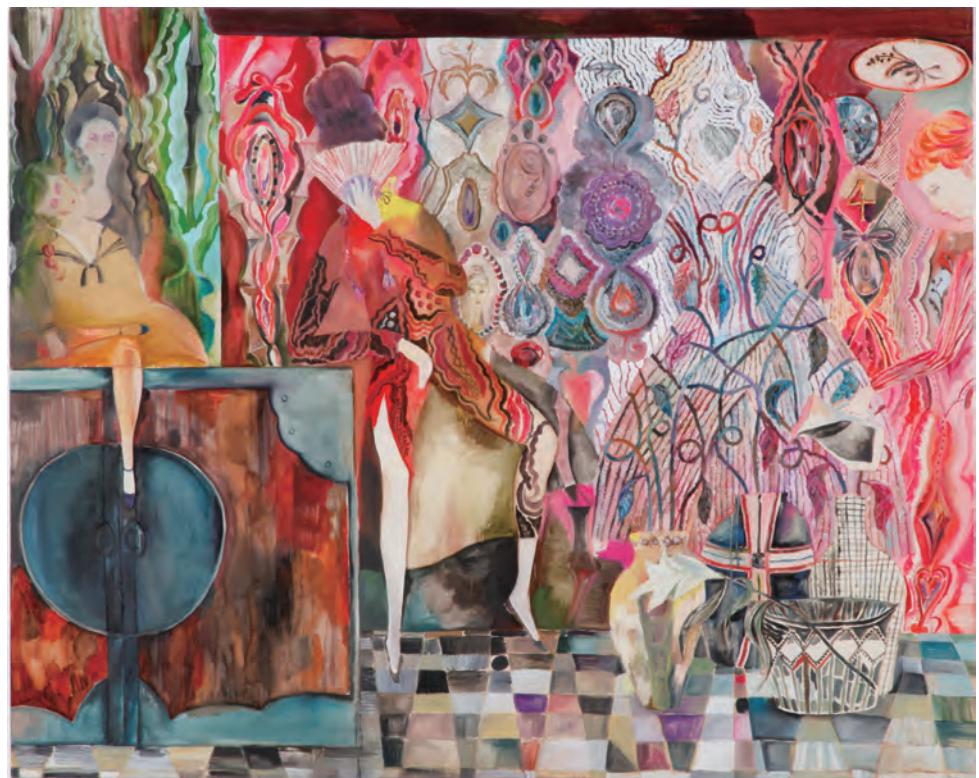
升谷真木子

あさがおの公園

アクリル絵具、コットンキャンバス

145.0×145.0cm

2014年



三井淑香

招く猫

綿布、油彩

181.8×227.3cm

2014年

photo by 木奥恵三



森 綾乃

ためらいをすぐう  
パネル、綿布、紙粘土、  
アクリル絵具、水彩、クレヨン  
130.7×162.0cm  
2015年



## ユアサエボシ

歌

アクリル絵具、キャンバス

97.0×194.0cm

2014年



吉岡千尋

muqarnas

油彩、蜜蠟、金属粉、白堊地、キャンバス

160.4×184.4cm

2014年



吉田桃子

FL,stay 12

アクリル絵具、油彩

61.0×110.0cm

2015年



展示風景



The  
Scholar20  
Perspective

Report

第28回奨学者のレポート

# 井上ゆかり

INOUE Yukari

## 絵画の時間

早朝、一日の始まりになぜ絵を描き続けているのか。改めて考えてみると、これといった明確な理由はないのだが、元来、朝型人間で一日の中の自分の一番コアなオンラインが早朝だからなのと、その能率が良い時間を使ってやりたい事が、油絵を描くという行為しか思いつかないからである。そのおかげで日中の生活が保たれているようにも思う。

日中は私もまさしく忙しい現代人の一人で、諸々の仕事に謀殺されながら他者との間での生活時間が淡々と流れていく。ぶり返る事も考える事もできないまま、蓄積された未消化の思いと疲労感とを抱いて眠りにつく。

そんな日々の中で、朝が来る前の制作時間は純度100%自分のためだけに許された、貴重な時間だ。この数時間の充実のためだけに日中のほとんどを過ごしていると言つても過言ではないと思う。

その貴重な時間に油絵具で絵を描くのが、まず平面芸術にこだわっているのは、二次元という制限があるからこそ、奥行き、温度、湿度、光、匂いといった三次元的空

間表現をよりリアルに描き出せる可能性があるよう思う。油絵具を使う理由は、絵具そのもののつややかな美しさと、表現の幅が広いと考えるからだ。溶き油を変えるだけで描きごたえのある粘度にも水のようになります。つまり、自由度が高い画材で単純に樂しいからだ。描く私の腕を通した筆の跡も、筆とキャンバス上で擦れる音も、偶然キャンバスの上で混色した色も、ワクワクする楽しさとゾクゾクする興奮を与えてくれる。

描く内容について決まり事は全くないのだが、良くも悪くも自分の見たい世界を描いてる。私は実際に自分の目で見た風景を舞台に、目には見えないが確実に存在するそこにある空気感、さらに自分なりに咀嚼した考えをキャンバス上で表し、私というフィルターを通してリアルな世界を描こうと思う。

舞台となる風景も、実在する物体よりもその影だつたり質感だつたりが大切なイメージを作り出す大きな要因となるので、背景のそのまた背景を描かなくてはならなくなり、絵のモチーフとしてはどるに足らな

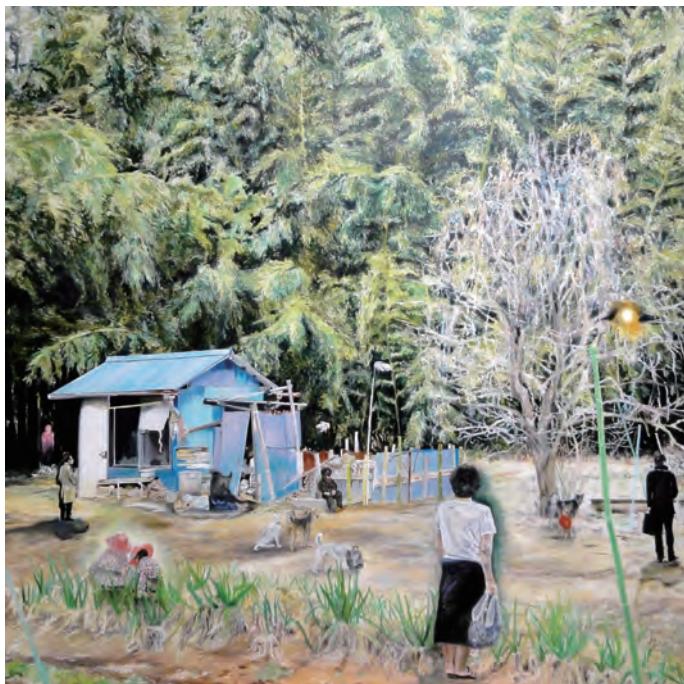
いささやかな物にも意味が出てくる。さらに私が選んだ必要と思うモチーフも並べていく。するとパズルのピースがはまついくよう、一つの世界が見えてくる。時として自分の想像を遙かに超えた世界が見える事もある。そんな時、妙な高揚感の中、絵の持つ可能性に驚き、喜び、嬉しくなる。しかし残念ながら一日もすれば興奮は冷め、新たな刺激を求めて真っ白なキャンバスと向き合う日々である。

今後も、恐らく超朝型制作は変わらないだろうし、その都度その都度、試行錯誤を繰り返しながら、正直に制作を続けていくつもりだ。そしたら何が出て来るのだろう。できれば私自身の予想を超えた何かがあらわになればと楽しみだ。



7 years old  
キャンバス、油彩  
194.0×162.0cm  
2014年

Last Frontier  
キャンバス、油彩  
162.0×162.0cm  
2013年



## 井上ゆかり

1979年 神奈川県生まれ

2002年 東京家政大学家政学部服飾美術学科美術専攻卒業

個展

2014年 井上ゆかり展 NICHE GALLERY／東京

グループ展他

2015年 第50回昭和会展 日動画廊／東京

2014年 ACRYLART展 NICHE GALLERY／東京

第32回上野の森美術館大賞展 上野の森美術館／東京('13 '12 '11 '10 '08)

京都文化博物館／京都 ('13 '11)

2012年 シエル美術賞2012 国立新美術館／東京

2010年 シエル美術賞2010 代官山ヒルサイドフォーラム／東京

2008年 アート・ランダム作品展 東京銀座画廊・美術館／東京

2007年 第1回ガレリアレイノ展 アステールプラザ／広島

二人展 NICHE GALLERY／東京

2006年 上海アートフェア 上海世界商城／上海（中国）

2006年 国際公募アートコンペティション NICHE GALLERY／東京

第31回現代童画会展 東京都美術館／東京 ('04 '03 '02)

# 大久保如彌

OKUBO Naomi

私は常に他人にどう見られているかということを気にしながら生活しています。

私の作品は、私の個人的なコンプレックスや思春期の体験をもとに制作されています。思春期に、人は誰しも自分の外見がどう見られているかということを気に始めます。私は服装を変えることで、周りの人自分に対する扱いが変わり、人との関係性も変わるということを、身を持って体験しました。ファッショング持つ力と、逆に人の視線の怖さを実感し、「人が外見を気にする」ことに強い関心を持ちました。

私の住む東京や他の先進国では、あらゆるメディアで作られた外見のイメージや、さらにライフスタイル、休日にどんなことをして過ごすのかという「イメージ」が提案されています。私たちはそれらに憧れ、自らの外見的なイメージを作り上げるときに、それらを利用します。

しかし、あまりにも多くのイメージに触ることで、それが作られたものなのか現

実のものなのか、また自分がそのイメージをどんどん消費することで、いったい何が現実なのかということが分からなくなっています。

日本では外見で主張する事よりも、同調する事が求められているように感じられます。ある雑誌では、「わたしつてどれくらい平均ですか?」と問い合わせる見出しで人々に偽の「ノーマルさ」を求め、街で見かける若者の集団には強いグループ意識が見られます。一見みんな同じ服装をしていてばかりしく思えますが、彼らはとてもシリアスにグループ内に留まりたいと思っているようにも見えます。形や方法は違つても、日本だけでなく世界中で人々が常に外見を気にしていることが伺えます。

それら一つ一つは個人の問題のようで、広く社会の問題や矛盾につながっています。私は自身の個人的な体験を元にしながら、そこで生まれる矛盾や問題を考え、作品に表現しています。

## ファッショントを通して見る世界



Where Should I Go?

パネル、綿布、アクリル絵具

45.5×38.0cm

2014年

photo by GALLERY MoMo

退屈しのぎ  
パネル、綿布、アクリル絵具  
45.5×53.0cm  
2013年  
photo by GALLERY MoMo



## 大久保如彌

1985年 東京都生まれ

2011年 武蔵野美術大学大学院美術専攻油絵コース修了

### 個展

- 2014年 A.Style／香港【中国】  
Konsthallen i Hamnmagasinet／ヴァールベリ【スウェーデン】
- 2013年 H.P.FRANCE WINDOW GALLERY MARUNOUCHI／東京  
GALLERY MoMo Ryogoku／東京('10)
- 2011年 GALLERY MoMo Roppongi／東京
- 2008年 東京都庁第一本庁舎3F南側空中歩廊／東京  
GALLERY MoMo／東京

### グループ展他

- 2014年 Artist in residence program Konst i Halland／ヴァールベリ【スウェーデン】
- 2013年 大絵画展 西武渋谷店／東京
- 2012年 Complex 日本橋高島屋美術画廊X／東京  
Summer Group Show GALLERY MoMo Roppongi／東京  
interaction vol. 1 GALLERY MoMo Roppongi／東京
- 2011年 再生 Part.2 GALLERY MoMo Ryogoku／東京  
分岐展 GALLERY MoMo Roppongi／東京  
ART AWARD TOKYO 丸之内 2011 行幸地下ギャラリー／東京
- 2008年 Opening Exhibition GALLERY MoMo Ryogoku／東京
- 2007年 ワンダーシード2007 トキヨーワンダーサイト渋谷／東京  
ときめき☆鎌水ランデヴー 鎌水青年美術館／東京  
トキヨーワンダーオール2007 東京都現代美術館／東京
- 2005年 シエル美術賞 代官山ヒルサイドテラス／東京

# 大山紗智子

OYAMA Sachiko

## 愛と（滑稽なる）景色

プラモデルに思い入れがあります。小さい頃のわがままと身近な人の死。

作らなかつた時期のほうが随分長いのですが、それでもたまに思い出しては雑誌を買って、美しいプラスチックやレジンの機体を眺めていました。一度刷り込まれた小さな世界への憧れは、ある瞬間に解き放たれて、すぐに私を違う世界へ連れ込もうとします。

私はいつでも行くことが出来る現実の空間に、プラスチックキットの戦闘機や戦車を迷い込ませ、描きます。それは、ただ淡淡と過去への後悔や、いつか来る死や、存在しない場所への憧憬をなぞつて、滑稽にあぶり出すという自虐行為かもしけないし、ただの現実へのいたずらのかもしだせん。ただ、個人的な辛い思い出などもお構いなしに私に幸福感を与える夢中にさせてくれる対象物への愛は、大前提にあると思います。

制作において、ひとつ的作品にあまり時間かけすぎないようにしています。既に頭の中にあるイメージを紐解くように、薄く薄く溶いた絵の具を重ねます。緩く有機

的な線を、薄く早く描くことで緊張感を保とうと考えています。時間を必要以上にかけてしまった時、頭の中のイメージというモチーフが腐り始めているのを感じます。暗い色から描き出しても、いつも螢光ピンクやエメラルドグリーンなど、鮮やかな色の絵の具に手が伸びてしまうのは、やはり戦争の道具としての戦闘機というより、愛の対象としてのプラモデルを描いているという意識が強いからだと思いません。

今まで、キャンバスに油彩というごく一般的な方法で描いてきて、この方法に特に疑問は感じていませんが、最近の作品では制作をより楽しむために、他の支持体や描画用具を使った作品の制作を試しています。また、モチーフについて様々なアプローチをするために、写真や立体の制作を計画しています。

淡淡と、滑稽に。

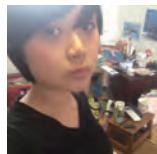
決して何かを悲観するわけではなく、ただ淡淡と滑稽に、自分の中にあるものをおぶり出していきたいと思っています。



ミラクル・ミラーボール  
キャンバス、油彩  
162.0×194.0cm  
2014年



(みどりの)象女  
キャンバス、油彩  
97.0×162.0cm  
2012年



## 大山紗智子

1986年 愛知県生まれ

2013年 名古屋造形大学造形学部洋画コース卒業  
2015年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻在籍中

### 個展

2015年 清須市はるひ美術館／愛知(清須市)にて12月10日～27日迄開催予定  
ない(ある) 場所 トーキョーワンダーサイト渋谷／東京  
2012年 エミリーのなすがまま Photo&Art Galleryブシュケ／愛知  
2008年 EAT IN→→→ golden child café／愛知  
2007年 きょくせんアワー 青樺ギャラリー／東京

### グループ展他

2015年 清須市第8回はるひ絵画トリエンナーレ 清須市はるひ美術館／愛知  
2014年 トーキョーワンダーオール公募2014入選作品展 東京都現代美術館／東京  
2012年 460人展 市民ギャラリー矢田／愛知  
2011年 翔け！二十歳の記憶展 CBCスタジオギャラリー／愛知  
2010年 二人展「情欲少女」 Photo&Art Galleryブシュケ／愛知

## 複演をなぞる

シリーズ名「true imitation」の作品コンセプトは、「視覚情報の状態と認識の関係について」です。「true imitation」の日本語タイトルは「複演をなぞる」であり、民族学者折口信夫の「複演（説明と抗弁）」という提言を引用し、imitation の意味を「本質が設定されている存在を前提としたもの」（模造・模倣・もどき）と理解して、視覚情報の状態がどのように認識に影響するか、情報を考査しています。

私は、表現の内在的性質は、常に一定で普遍的で一般的なものとしては、万人に共通されない、と考えます。さらに、表現を受容する知覚体験とは、人間が個別の器官・機能を有することを前提とする、個別的な体験であるので、ある刺激に対しても常に一定で普遍的で一般的な体験が、万人に共有されるわけではない、と考えます。よって、「ある表現のどの範囲をどれくらいどのよう

の中で恣意的に記号化をする働きであると考えます。  
そしてこの考察は、絵画における表現に對して絵画論的な記号化を行う場合にも考慮されるのではないか、と考えます。絵画において、ある表現を知覚した時に、一体どの範囲をどんな理由で絵画論的に記号化しているのか。私は、この「相対化されづける表現の無限ループ」に出来るだけ自覚的であろうとしながら、「表現が記号化される時の視覚情報の状態」について試行錯誤し、作品を制作しています。

「不死である」とは無意味なことだ。人間を除けば、すべての生物は不死である。なぜなら、彼らは死というものを知らないから。神聖なもの、恐ろしいもの、不可知なものは、みずから不死たることを自覚しているものだ。（ホルヘ・ルイス・ボルヘス、土岐恒二訳『不死の人』、1996年、白水Uブックス、25頁）

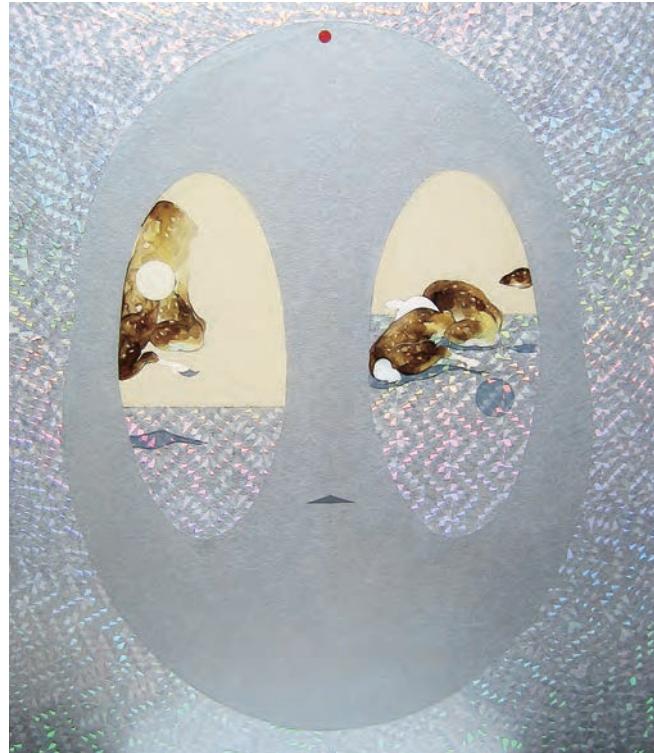
私は、自らの抱える不調和を口実的に埋めていく代替行為について考えます。

を持つているわけではなく、表現と内在的性質を統合する認識とは、相対化の関係性である、と考えます。表現は常に明確な輪郭を持つっています。表現は常に明確な輪郭を持つているわけではなく、表現と内在的性質を統合する認識とは、相対化の関係性



**true imitation**  
和紙、ホログラムシート、スクリーントーン、顔料等  
112.0×162.0cm  
2014年

複演をなぞる  
和紙、ホログラムシート、顔料等  
53.0×45.5cm  
2013年



## 小川 遥

1987年 静岡県生まれ

2010年 多摩美術大学絵画科日本画専攻卒業

個展

2008年 銀座アートスペース／東京

グループ展他

2014年 新春セレクション展 かわかみ画廊／東京

2013年 第19回三菱商事アート・ゲート・プログラム チャリティー・オークション作品展 表参道GYRE／東京  
トーキョーワンダーウォール公募2013入選作品展 東京都現代美術館／東京  
第8回タグポートアワード入選者グループ展 世田谷ものづくり学校／東京

第8回 大黒屋現代アート公募展 板室温泉大黒屋／栃木  
第8回タグポートアワード入選者グループ展 世田谷ものづくり学校／東京

2012年 グループ展6femmes2 アートスペース羅針盤／東京  
トーキョーワンダーウォール公募2012入選作品展 東京都現代美術館／東京

第7回タグポートアワード入選者グループ展 世田谷ものづくり学校／東京  
ワンダーシード2012展 トーキョーワンダーサイト渋谷／東京

2010年 グループ展6femmes スルガ台画廊／東京

2009年 ターナークリアーアワード2009作品展 O美術館／東京

# 鳥山秀直

KARASUYAMA Hidetada

## 零的

絵画が絵画である為には既存の絵画構造（メディウム・支持体・身体・行為・精神・時代背景など）を検証し、解体・再構築していかなければ、可能性を持った絵画は現れない。そして様々なメディア・媒体が出 現する度、存在 자체問われ揺さぶられ続けた。それでもなぜ描くのか、なぜ絵画のか かという執拗に近い危機感や問いに対し ての回答により、絵画は辛くも存在してきた ように思う。何時の時代の画家達も直面し たであろうこの問題は、特別な事ではない。

今、世界は物流・情報網の発展、発達に より、ある程度環境の整つた場所では、情 報や文化・モノをほぼ瞬時に獲得すること が可能である。それらと同様に、私達は世 界（東洋・西洋）の文化と歴史やモノを同 系列に、渾然的に吸収していくた世代でも あり、これまでになく水平な空間になつた、 とも言えるのではないだろうか（その場所 でしか知ること、見られないものは確実に 存在するが）。

その影響・環境の中で強烈に、あるいは 幽かに感じた思考や経験を元に、得られた 図像や構造を借り、行為と素材を織り交ぜ、

（メディウム・支持体・身体・行為・精神・ 時代背景など）を検証し、解体・再構築し ていかなければ、可能性を持った絵画は現 れない。そして様々なメディア・媒体が出 現する度、存在 자체問われ揺さぶられ続けた。それでもなぜ描くのか、なぜ絵画のか かという執拗に近い危機感や問いに対し ての回答により、絵画は辛くも存在してきた ように思う。何時の時代の画家達も直面し たであろうこの問題は、特別な事ではない。

今、世界は物流・情報網の発展、発達に より、ある程度環境の整つた場所では、情 報や文化・モノをほぼ瞬時に獲得すること が可能である。それらと同様に、私達は世 界（東洋・西洋）の文化と歴史やモノを同 系列に、渾然的に吸収していくた世代でも あり、これまでになく水平な空間になつた、 とも言えるのではないだろうか（その場所 でしか知ること、見られないものは確実に 存在するが）。

支持体は、正方形という形状を縦横に可 変する気配を持つた形として採用している。 正方形は木枠の形状が円柱で組まれ、その 端はぼやけ、水平線や地平線の向こう側を 想像させ、四隅の角が際立つ効果を狙つて いる。木枠には高透明度のシルクオーガン ジーを張る。メディウムは支持体を考慮し 使用する。例えば、エナメル塗料・アクリ ル絵具は生地に皮膜を形成するので、不透 明な箇所が生まれ、塗料・絵具の特性によ り、微妙な質感の違いが現れる。その他に、 顔料などを一切混合せず、透明メディウム のみ塗ると一見、何も描かれていないよう 見えるが、透明な生地のため厚くメディウ ムをのせた箇所は影だけが投影される。色 鉛筆や水彩は、生地を染めたり、色を刷り 込むことで、色は確認可能でも影が発生し ない効果を生む。パール系の絵具を使用す るのは主に光の反射を狙つたものだ。顔料

連続・更新させ制作している。また、これ らの作業は全て身体性が伴つてゐるために、 差異が生じ、一見同様の図像がパターンと して描かれてゐるが、全て異なるものを描 いてゐるともいえる。

の粒子が目視可能な程、粗い物質をメディウムやパール系の絵具に混合し使用する箇所もある。

このような一連の作業を、オーガンジーという支持体を水平・垂直に置きながら作業を行っている。支持体が大型の場合、枠内に入り込む形で行う。前後、表裏、全方向から描く事により、複雑で奥行と拡がり（またはその逆）が生まれ、平面上に出現した多くの模様、現象などが絡み、連鎖し新たな模様を出現させ、果ては平面上以外の場所（空間・時間・精神）へも拡散するよう・・・または全体で一粒の粒子を見ているように、一つの模様で全体の景色が見えるように制作を行う。

実際の作品（と呼べるのだろうか）を前にし、無限にまたは根源に、その間で様々な風景と重なり、出会い、揺れ動く感覚に見る者が陥つていけるような絵画を制作したい。



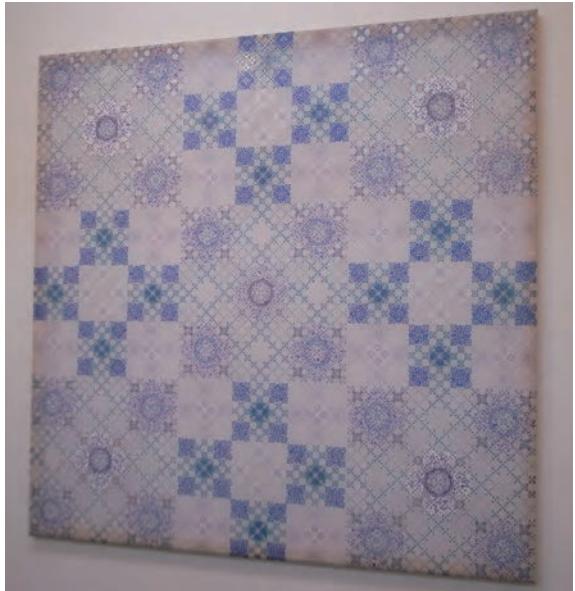
作品右より 振響 II No.7, 振響 II No.13, 振響 II No.14

アクリルメディウム、顔料、水彩、色鉛筆、エナメル、アクリル絵具、シルクオーガンジー、木枠  
275.1×275.1cm

作品右より 2010年, 2012年, 2012年

**振響 II No.22**

アクリルメディウム、顔料、水彩、  
色鉛筆、エナメル、アクリル絵具、  
シルクオーガンジー、木枠  
170.1×170.1cm  
2013年



## 烏山秀直

1978年 長崎県生まれ

2003年 多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業

### 個展

- 2013年 トキ・アートスペース企画シリーズ“Critical Painting” TOKI Art Space／東京  
2012年 個展 TOKI Art Space／東京 ('11)  
2010年 個展 Plaza North／埼玉  
2008年 仄 Plaza Gallery／東京  
2007年 振響 ART TRACE GALLERY／東京 ('05)  
2003年 零的 ギャラリー汲美／東京  
2002年 傍らの彼方 毎日アートギャラリー／東京

### グループ展他

- 2015年 中国広州日本現代アート展2015 53美術館／広東省[中国]  
Private group exhibition -中村英樹氏を招いて- nagasaki factory、諫早造形研究室／長崎  
-O+マイナス・ゼロ・プラス gallery COEXIST-TOKYO／東京  
2014年 songs for a pigeon 在日本スイス大使館、gallery COEXIST-TOKYO、Plaza Gallery／東京  
西宮船坂ビエンナーレ2014 西宮市山口町船坂／兵庫  
2013年 私小説 中村研一・烏山秀直2人展 Nomade Gallery／浙江省[中国]  
絵画表現の現在 -烏山秀直- 名古屋芸術大学／愛知  
2012年 行為の触覚 反復の思考 上野の森美術館／東京  
透過する搖らぎ 小川泰生・烏山秀直2人展 Gallery YASURAI／佐賀  
2011年 "TEGAMI" Perspektiven japanischer Künstler ハンブルグ日本映画祭／ハンブルグ[ドイツ]  
2010年 Open Studio Atelierhaus Arlesheim／バーゼル[スイス]  
Tokyo Art Night Atelierhaus Arlesheim／バーゼル[スイス]  
2009年 A trace of 10 years in Gallery Den 現代 HEIGHTS GALLERY DEN／東京  
2008年 THE NEXT Gallery Stump Kamakura／神奈川  
暗月—a dark moon— 現代 HEIGHTS GALLERY DEN／東京  
2007年 ART TRACE @ youkobo 遊工房アートスペース／東京  
2003年 森岳 ART Contemporaneous 島原市森岳商店街／長崎 ('01,'02)

## 捉えること 制作すること

いつもの通り道にある田んぼを、何気なく見たとき、私は生まれて初めて田んぼという風景を目にしたかのような感覚を得た。いつの間にか田んぼとは、こういうものだとなんとなく理解し、頭の中で情報として整理され、見ているつもりになっていたのである。このときに、私の「見る」という行為は、曖昧な知識や経験によつて制限されていることに気がついた。

それから、私は事象を観念的に捉えるのではなく、一つ一つそれをそのものとして捉えることを様々な方法でおこなつてみた。

このように認識を改めることによって、捉え方が制限されていたときには、気付かなかつたことに気付くことができるようになれる。その気付きをもとに再び制作し、自分の中にさらに新しい見方を取り入れる。そうすると、対象が今までとは違つたものに見えてくるのである。

再現することによって、画面上のどの部分も主役ではなく、どれもが主役であるニュートラルな状態を作り出すことができる。また、意図してその状態を作り出すだけではなく見えてきたものの、どれにも等しく目を向ける意識をもつて描くことで、自然にどれもが主役になる画面にすることができる。

具体的な制作方法としては、「untitled(2013-1)」のように一瞬を切り取った写真から、自分の目で捉えた形と色を一つ一つ画面に写していくことで、はじめて対象を見た瞬間のような感覚を得られる風景が、画面上に立ち現れるという方法。

「untitled(2014-d1)」のようにキャンバスや紙などの支持体自体をモチーフとして扱い、風景画の風景を色や形に分解するようには、支持体を対象として観察したときに立ち現れてくる色や形を追つてなぞり描くという方法（この方法をつかって制作を行うと、自分の中からだけでは出でこないニュートラルな形、目の前に起こつてくるそこ

にしかない一つずつ違う愛おしく楽しい形が現れてくる。

その他にも動いている車の中からや、歩きながら描いたり、夕日や揺れるカーテンなど移り変わる速度の早い対象を描くドローイングを行っている。この方法を使うと、目に飛び込んできた時的新鮮さを保った筆の動きになり、意図しなくても心地よい地と図の関係が現れる。

主に、このような方法で制作を同時進行でおこない、方法同士や捉え方自体が互いに影響し合い、少しずつ変化したり新しい方法が生まれてくる。

目を閉じたまま聞こえてくる周りのあらゆる音をその場で点や線にして描くドローイングを最近制作し始めた。

これまでにひいたことのない線や点も現れ、自然と描かれている部分も含めた、色や形の魅力的な関係が現れてきている。



untitled(2014-d1)  
紙、色鉛筆、カラーペン、クレヨン、アクリル絵具  
65.7×88.5cm  
2014年



untitled(2013-1)  
キャンバス、油絵具  
181.8×227.3cm  
2013年



## 川口洋子

1990年 大阪府生まれ

2013年 京都嵯峨芸術大学短期大学部研究生修了

### 個展

2015年 Oギャラリーeyes／大阪にて10月19日～10月24日迄開催予定

2014年 Oギャラリーeyes／大阪 ('13)

2012年 ギャラリー301due／神戸

2009年 京都嵯峨芸術大学アートプレイス U2／京都

### グループ展他

2014年 les signes III Oギャラリーeyes／大阪  
流れの風景 2kwギャラリー／大阪

2013年 ONE ROOM'13 京都嵯峨芸術大学クラブボックス／京都 ('12)  
Container Drawing Project メリケンパーク神戸港エリア／神戸

2012年 GALLERY301 GROUP EXHIBITION 2012 ギャラリー301／神戸  
Tourbillon X Oギャラリーeyes／大阪

2011年 Painting point 同時代ギャラリー／京都  
Umino Yuka × KAWAGUCHI Yoko exhibition 京都嵯峨芸術大学アートプレイス U2／京都  
2010年 ただ見てもらいたいんだよね Art Community Space AKIKAN／京都

# 菊池奈緒

KIKUCHI Nao

## 崩落した台座に像は持続するか

目の前のノートには時系列も内容もばらばらの、断片的なメモが殴り書きされている。映画の感想の隣には左手のスケッチ、次頁にまた映画の感想、降りる駅と電車賃のメモ、発音のわからない外国语、空白の二頁を挟んで昨夜の夢の話。うす黄色の紙をめくれば、それまで眼前にあつた風景はたちまち遠のいていく。

隣り合う頁が同時に視界に入らないという点において、ノートには断絶が伴う。少なくとも開いている頁以外に記された文章を読み上げることは出来ない。断片としてあるそれぞれの頁は、実際には糸で綴られてひとつつの物体として収まっているにも拘らず。裏面に染みたインクのにじみ、雨に打たれて波打つた側面、透けて見える鏡文字こそが、其々を関連付けている。

絵で言えば、私たちが最終的に目にすることができるのは完成して現れた表層、その輪郭であるにも拘らず、絵にはそれ以外のものがどうしようもなく関連している。現れるべくして出現したかのように感じられるその表層へ、到達するまでに起こりえた筆致と色と質のあらゆる可能性に心が奪

われる。絵具の盛り上がりの下層に置かれたはずのひと筆、覆われた麻地、ちらちらと覗く透明色、毛羽立った紙の纖維。それらのひとつひとつに、過ぎ去った瞬間が宿っているかのようだ。

画面へ出現するイメージに対し、消え去れ、とも消えないでずっとどこに在つて、とも思う。線を引いては打ち消し、絵の具を重ねては拭う。そうして物質としての絵画が立ち上がるとき、そこでは現象が持続して、絵は揺らぐ存在として在るはずだ。

私たちの眼前にある作品は、物質が時をまたいで現在という地点まで到達したが故に体験できる。剥がれかけの壁画、砂に吹かれて傷だらけのガラス板、光を受ける川の水。芸術作品に限らずとも、現れることと感じていて、その現象を私は行為として実践したいかもしない。体が消えたのちの世界に、私の行為がその空間のルールでもって持続し得るということを知つてみたい。それは現在という限られた一点しか、触れる事を許されない私にとつての希望もある。



3 minutes hug  
キャンバス、油彩  
33.3×33.3cm  
2015年



わかり合えないいくつかのこと  
キャンバス、油彩  
112.0×145.5cm  
2011年



## 菊池奈緒

1988年 栃木県生まれ

2011年 多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業  
2013年 多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻油画領域修了

個展

2011年 知覚のシルエット kcucha rismo／栃木

グループ展他

2014年 跳ねる土 HIGURE 17-15cas／東京  
日本コラージュ展 ギャラリイK／東京  
2013年 呼ぶ、呼ぶ、呼ぶ TURNER GALLERY／東京  
東京五美術大学連合卒業・修了制作展 国立新美術館／東京  
2012年 めをつむる・なせる・せんひき・めくりとる 多摩美術大学／東京  
WATARASE Art Project 2012「PARADE」 旧渡良瀬社宅／栃木  
潜水と浮上 ギャラリイK／東京  
清須市第7回はるひ絵画トリエンナーレ 清須市はるひ美術館／愛知  
2011年 シエル美術賞2011 代官山ヒルサイドフォーラム／東京  
隣人たち 多摩美術大学／東京  
トーキョーワンダーウォール2011 東京都現代美術館／東京  
東京五美術大学連合卒業・修了制作展 国立新美術館／東京

## 断片の着地点

描くイメージは、ものすごい速さで流れ去る日々の中からかろうじて捕らえた断片の中から選びます。その断片とは、例えば不意に鏡の中の自分と対面する瞬間や、見慣れたはずの日用品の形に惹かれる瞬間や、同じ空間にいる人の気配を強く感じる瞬間であったりします。その他の忘れてしまった膨大な時間とそれの一瞬の差はほんのわずかで、視覚的な刺激が関係したり心理状況が関係したりして、対象も状況もまちまちです。しかし、特別視してしまう一瞬には、宙に浮いたような消化不良の感覚が伴うところは共通しています。その不完全とと考えています。また、何かと何かの間のようない、時間が止まっているけど呼吸しているような、そんな場所と時間を作品にしたいと考えています。

自分の実際に見た光景を出発点にしていますが、描いていく中でどこか他人事のような遠さを感じることもあります。このように主観と傍観の間を行き来しながら私にとっての実感を摸索しています。

そして日常の中の不完全な断片を無理矢

理存在させようとしたとき、自然と作品の大部 分をもつたりとした絵の具で満たすことが多くなりました。油分の多い絵の具を厚塗りにした表面は皮膚を思わせ、その絵の具に覆われた絵画は単なるイメージの説明ではない生き物のように自立した存在になると感じるからです。

作品の完成に関しては私の中に確かに基準はあります、言葉にすることはできていません。最終的には一つの明快なイメージに到達できるよう、出会いたい絵画に出会えるまで絵を動かし続けています。これからも言葉から始まらない絵を描いていこうと思います。



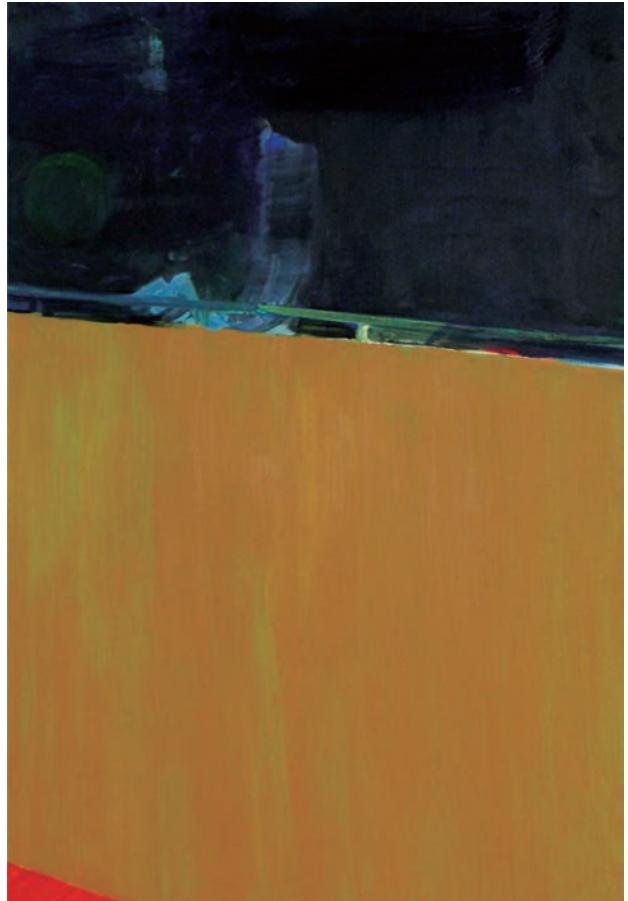
至福

キャンバス、油彩

162.0×130.0cm

2013年

ペランダ  
キャンバス、油彩  
145.0×97.0cm  
2013年



## 黒河 希

1990年 愛媛県生まれ

2013年 武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵先攻卒業  
2015年 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

### 個展

2015年 TWS-Emerging2015 トーキョーワンダーサイト渋谷／東京(渋谷)にて11月7日～12月6日開催予定  
Gallery Face to Face／東京

### グループ展他

2014年 シエル美術賞展2014 国立新美術館／東京  
トーキョーワンダーオール公募2014入選作品展 東京都現代美術館／東京('12)

<http://kurokawa-nozomi.jimdo.com/>

# 坂本夏子

SAKAMOTO Natsuko

## 夏（犬と坂道）

構想は、手帖に描いていた一枚のドローイングから。数匹の犬が坂道を登っているのを正面から見た絵だ。お尻をこちらに向けた犬たちは、とてもラフに描かれたせいか、地面に対して垂直に立つてたり、浮いているように見えたりした。

ドローイングを重ねながら油絵を描く準備をした。元になつたドローイングには坂道の脇に植え込みの木や壊れた柵のようなものが描かれていたが徐々に消されていくて、空の面積も少なくなつて、画面いっぱいに大きく立ちはだかる大きな坂道とそこに立つ数匹の犬のみの構造になつていった。

木枠にグルーキャンバスを張り、画面一面にシルバーホワイトとアイボリーブラックなどで混色した明るいグレーを不透明に塗り込めて、完全に乾くまで待つた。アトリエはすごく暑かつたからとても早く乾いた。

画面の下のほうから、犬と地面を同時に描いていった。油絵具の筆触が地面を擬態して夏の日差しを浴びた湿った土に見えた、雪が溶けてぐちやぐちやになつた道路に見えたりした。そして、やはりただの絵具に見えたりした。絵具とイメージの調和と不

均衡がちょうど同じくらいに見えてくると、絵の空間と呼べるものに触れる。

絵具のタツチが下地のグレーを少しずつ隠したり、タツチとタツチの隙間からグレーをのぞかせたりして画面は覆われていった。犬が現れるたびにスケールと距離感が曖昧になつてきて、登る坂道を見ているのか、下る坂道を見ているのか、絵も私も確信を持てないまま、少しづつ画面を埋めていった。描いた地面の上にまた地面を描いたり、犬を消したりまた描いたりを繰り返すと、空間のスケールが変化したり、手前だったものと奥だったものの位置の逆転が起こつたりした。

絵はやがて、筆がこれ以上入ることを拒み完成を迎えたが、絵の空間は未完成のままキャンバスに張り付いている。

（2014年の梅雨から夏が終わるまでに描いた絵について）



夏(犬と坂道)

キャンバス、油彩

194.0×162.0cm

2014年



## 坂本夏子

1983年 熊本県生まれ

2012年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了

### 個展

2014年 坂本夏子の世界展 ARATANIURANO／東京

2013年 ARKO2013坂本夏子 大原美術館／岡山

2012年 Still Life ケンジタキギャラリー／東京

2010年 BATH.R 白土舎／愛知

2008年 overflow 白土舎／愛知

### グループ展他

2014年 夏と画家 ARATANIURANO／東京

バーブルーム大学 山下ビル／愛知

バーブルーム大学Ⅱ 熊本市現代美術館GⅢ／熊本

2013年 であ、しゅとうるむ 名古屋市民ギャラリー矢田／愛知

正しい絵画のつくり方 ARATANIURANO／東京

2012年 魔術／美術-幻視の技術と内なる異界 愛知県美術館／愛知

ポジション2012 名古屋市美術館／愛知

2011年 イコノフォビア-図像の魅惑と恐怖- 愛知県美術館ギャラリー／愛知

2010年 絵画の庭-ゼロ年代日本の地平から- 国立国際美術館／大阪

### 訪問者

キャンバス、油彩

259.0×364.0cm

2013年

私の絵は、昨今の人々の状況、状態、空虚感を感じ描いている。

戦わずして、敗北すると決めつける心は、なぜ形成されてしまうのか？逆に考えると、優しすぎて、柔らかすぎて、いい人すぎる。と捉えてもいいだろう。

最近の日本の雰囲気は、景気も含め、浮上してきているとは言え、まだまだ、沈没傾向だ。低迷しきった日常を何とか乗り切ろうと、「あくせく」「せかせか」「ピリピリ」とした単語が、メディアを通して、聞こえてくる。

まだなのか？終わるのか？そんな見えないゴールを探して、ひた走る人間は、もはやハムスターの回転車を思わせる。最近は、そんな力もなくなつて、床にうずくまる人間も多くなつた。

町にあふれる、ストレス軽減グッズ。肩こりめまいには、この薬。人間関係のもつれには、心理カウンセラー・・・。

ちょっとお聞きします。

「最後に、深呼吸したのはいつですか？」

そんなことを、ふと周りの人間に聞くと、意外に、「何時だっけ・・・？」と、考え込む人が多い。

呼吸はしている。しかしそれは、無意識に「ただしている」だけ。

社会という大きな波に流され、忙しく毎日を過ごす。だからこそ、ふと立ち止まつて深呼吸をする。そんな何気ないことが大切なではないだろうか。

それなのに、昨今の生活に「呼吸」が取りざたされることはない。こんなに親密に深刻に、あなたに、仕えているのに・・・。

そんな、空虚を描きたいと考え、私は描いている。目に見えない、しかし、絶えず私たちの目の前に存在する抽象的な空間を。ひとえに「抽象的」といっても広い。

私なりの抽象的を説明する考えがなくてはいけない。自分なりのルールを提示しなければいけない。

それは、「私の描く作品は極力アウトラインを描かない。」ということだ。これは、「存

在するモノは全て区切る線は存在しない』  
という私なりの考え方から来るものだ。

この考え方を見ている人に伝えるために、色彩だけでモノを描けないだろうか?

見ている人に想像させる部分、つまりあえて描かない部分を作り、見ている人の感覚を刺激する。私の『ある意味未完成作品』と観客の『刺激された感覚』が合体して初めて私の絵画は完成する。それが私なりの抽象的絵画の考え方なのだ。

私の絵画に安定性はない。

「これが柴田久美の絵画だ。」

といわれるよりも

「これも?これも?柴田久美の作品なの?」  
と様々な面を見ていただきたく、最近では

ホルベイン・スカラシップでいただいた、  
さまざまな画材で制作している。

私自身、沢山の引き出しを作り、いつか一つのキャンバスにその引き出しからのテクスチャーが一枚の作品になればいいと思つてゐる。



海と泡  
パネル、アクリル絵具、水彩  
直径40.0cm 1点  
直径30.0cm 2点  
2014年

inside  
キャンバス、油彩  
145.0×89.0cm  
2008年



## 柴田久美

1984年 東京生まれ

2008年 多摩美術大学造形表現学部造形表現学科油料専攻卒業

### 個展

2010年 呼吸展 新宿西口プロムナード・ギャラリー／東京

### グループ展他

2015年 新宿西口プロムナード・ギャラリー／東京にて12月19日～2016年1月2日迄開催予定  
池袋アートギャザリング 池袋駅周辺／東京

2014年 こちらから見た世界展 新宿眼科画廊／東京

2013年 ポートフォリオを 観て話す会と展示vol.02 新宿眼科画廊／東京

2010年 グループ・ケルン・ジャパン展 TKW、ALTES PFANDHAUS／ケルン[ドイツ]

2008年 多摩美グループ展示 新宿西口プロムナード・ギャラリー／東京

2006年 ku-ki展 世田谷区民ギャラリー／東京

# 柴田まどか

SHIBATA Madoka

視覚的な欲求不満がある。

私がとらえる視界は美しい。

その視界を己の内に攝取したいという欲求がある。

私は制作に、今は花や風景を多く使うが、それらを描きだしたいわけではない。

花や風景ももちろん美しいが、いくら眺めても、写真におさめても、美しさに対する欲求は満たされない。

何がそんなに不満なのか。

どうやら、私が摄取しきれない対象の中で最も興味をひくのは、色彩であるらしい。

色彩は何かのイメージを離れて存在するものではないと考える。

色彩は色としてのみ存在させる試みも多くあり、非常に面白いと思っているが、私はそれをしない。

そもそもその試みは、常に色にはイメージが付きまとう、ということが前提だ。私の視覚がとらえる色彩は、常に具体的なイメージを想起させる形とともに表現される。

その方が、色彩が色彩としての力や性格を

より多く發揮できる。

個々の具体的なイメージは、むしろ色彩の中にある内臓のようだと感じる。だとすれば、色彩は私たちと同じ生命体である。内臓がなくなれば死んでしまう。

これはゲーテやシュタイナーの色彩論にある通り、色彩が単なる光の現象ではなく、「常に有機的なものである」ということだ。中におさめられる内臓（形やイメージ）の種類はなんでもいい。ただその色の性格に合わないイメージをあてはめるのは、なかなか難しいというだけだ。

例えば「赤」を見つけるときに、一般的によく見る、しつとりした月夜のイメージとともに存在しにくい。

「しつとりした赤い月夜」を表現するという行為にはとても興味を抱くし、実際、具体的に赤で月夜を描くことは可能だ。でもそれは、赤によって現実に存在した月夜のイメージを変質させることに他ならないので、これはまた別の話。

だが現実に存在するイメージを変質させることのできる色彩というものには、やはり強い生命力を感じる。

視界も色彩も攝取不可能な為、実際に触れることのできる媒体（絵具やキャンバス）を使つて消化してみる。

行為としては、「色彩の生命力を己のうちに攝り込むことは可能か」ということになる。そうして消化された画面は、欲求を満たしたあの残り香のようなものではなく、体の一部でもない。化学反応を起こしたかのように、何か別のものとして現れてくる。この「何か別のもの」に内包されるものはなんであろうかと考える。

私が描いた画面を個々の人間がまた別の視覚でとらえる。もしその人に、何かを攝取（または接種）させることができたら、新しい化学反応が起ころ。この現実世界が、「何か別」の方向へ、建物が増築されるよう広がっていくのではないか。

私が創る画面も、色彩と同じく有機的で流動的なものであつて欲しい。

私の視覚的欲求不満は、色彩と世界が生きている限り、なくなりそうにはない。



紅白ピンク図フェイク入り  
キャンバス、油彩  
50.0×60.6cm  
2015年



ほおづきの通路は地下  
キャンバス、油彩  
53.0×72.7cm  
2013年

## 柴田まどか

1974年 神奈川県生まれ

1998年 武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業

### 個展

2013年 柴田まどか個展『マド科帳・色ん縁り』 DOKA Contemporary Art／東京

2012年 柴田まどか個展『マド科庭・べっかん個』 Oギャラリー／東京

しばたまどか個展『採集色可能・マド科庭』 啓祐堂ギャラリー／東京

2010年 しばたまどか個展『色ハニ マド科 散リ 塗ルヲ』 Oギャラリー／東京

2009年 しばたまどか個展『シバタマド科』 Oギャラリー／東京

### グループ展他

2015年 99人展 サムホール・コミュニケーション展 Gallery Q／東京

～花まんかい～春の秀作絵画展 京成百貨店6F アートギャラリー／茨城

アートフェア東京2015 東京国際フォーラム／東京

2014年 Field of Now 2014 a group exhibition by 13 emerging artists 銀座洋協アートホール／東京

2013年 第5回三井不動産商業マネジメント・オフィース・エクスピション 浜町センタービル／東京

ART colours vol.5 「ゆるりゆられり」展 パークホテル東京／東京

ART meeting展 銀座三越／東京

## 制作から見えてくるもの

絵を描くことは自分を解放する手段でもあり、手や身体を動かしながら描く行為は生きている実感を持ることでもあります。制作のイメージとして、水が地中から湧き出ている泉や、水滴が上からぼたぼたと落ち、水が溜まつていくイメージを持つています。早く形にしようと焦ると、その水が枯渇するように画面から面白みが消えてしまい、それ以降の制作が進まなくなることが多いので、ゆっくりとじっくりと制作をすることを心がけています。また、ふと浮かんできた記憶やイメージをいつでも受け止めることができるようにしていきたいと思っています。

実際には、今まで見てきた風景や光景の記憶の断片を手がかりにして制作を進めていきます。記憶の断片は主に、雨や雲や雪、風に揺れ光や色と形を変化させていく草木や花、水溜まりや池、湖の水面、水が流れしていく川や海の波などです。常に変化していくものに興味を持っています。日々の生活の中で、ふとした時に雲の隙間から見えたり、青空であったり、はつとする夕日であったり、いつもと違った時間の流れを感じる

光景を形にしてみたいと思います。しかし、そういった光景の記憶を忠実に再現するのではなく、制作過程の道筋の手がかりにします。

一筆一筆描いていくと、違うものへと変化していくことがあります。それをそのまま受け止め手を動かしていると、自然と思いまよらない新たなものが画面から立ち上がりります。

また、制作中の画面とのやり取りを通じて、その時その時で表現に合う素材や道具を選びます。キャンバスは麻布や綿布や帆布などで、木枠やパネルに張った後に下地作りをするのですが、時には下地作りの前に糸で縫うこともあります。縫うようになつたきっかけは、東北地方の青森の刺し子の着物を見て、手仕事のあたたかさと強さ、作為のない美しさに衝撃に近いものを感じ、手仕事の集積を加えることで、より作品の強さを出すことができたら、また、より表現したいものに近づけることができるのではないかと感じたからです。糸で縫う単純な作業をしていると無心になれる時があります。

呼吸のリズムに合わせて縫つていくと、部屋の外から風の音や虫の声、人の生活の音が聞こえ、外の空気と一体となるような、その一部になるような感覚になることがあります。そして、画面上の点や線がふと前述したような風景の記憶の断片と重なり、次の工程の道筋が見えてくるのです。

一つ一つの制作過程の選択の集積から、点や線、色や形の反復から生まれるリズムが画面に立ち現れ、記憶と結びつくことで言葉として表現できなかつた何かが見えてくることにより、奥底に沈殿していた記憶を呼び起こすような作品を作つていきたいと思います。



すきま

油彩、アクアオイルカラー、ジェッソ、  
クイックベースホワイト、膠、糸、  
麻布、パネル  
59.5×42.2cm  
2014～2015年



## 鈴木敦子

1981年 東京都生まれ

2004年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業

### 個展

- 2015年 iGallery DC／山梨にて 7月19日～8月16日迄開催予定  
2014年 かさねる 藍画廊／東京  
2013年 つなげる OFFICE IIDA／東京  
2012年 フウケイ 藍画廊／東京  
2010年 藍画廊／東京 ('07 '06)  
描く・ぬう A-things／東京  
2008年 画廊からの発言—新世代への視点2008 藍画廊／東京

### グループ展他

- 2015年 Inner History 藍画廊／東京にて 8月24日～8月29日迄開催予定  
絵画を考える—イメージ (part 1) 自然 工房親／東京にて 10月2日～10月24日迄開催予定  
2014年 ART OSAKA 2014 ホテル グランヴィア大阪／大阪  
2013年 VOCA展 2013 現代美術の展望—新しい平面の作家たち 上野の森美術館／東京  
絵画を考える—一色彩 工房親／東京 ('12 描くモノ'11 支持体'10 絵画のサイズ・絵画のイメージ)  
2011年 Art in an Office—印象派・近代日本画から現代絵画まで 豊田市美術館／愛知  
2010年 時の遊園地 名古屋ボストン美術館／愛知  
光の情景 鞍ヶ池アートサロン・トヨタ鞍ヶ池記念館内／愛知  
2009年 2009 ASIAN STUDENTS YOUNG ARTISTS ART FESTIVAL Defense Security Command Old building／ソウル [韓国]  
2008年 ASIA TOP GALLERY HOTEL ART FAIR 2008 ホテル ニューオータニ／東京

すきま  
油彩、アクアオイルカラー、ジェッソ、  
クイックベースホワイト、膠、糸、  
麻布、パネル  
59.5×42.2cm  
2014～2015年

## 作品、制作に関するここと

過去の記憶や、とりとめのない想い、何気ない喜びや悲しみでさえも、日々無意識に繰り返される行為とともに忘れていくつてしまふ。いつ無くしたのか、それすらも分からぬし、失った事に気づきもしない。思い出すまで気づかない、そんな事は無かつたことになつてゐるが、「忘れる」という行為を本当に理解しているのだろうか。何もしなければ、一喜一憂したであらう忘れたくない想いまでも留めておく事ができな。曖昧になつて薄らいでいく、私達にとって都合良く残された過去が、未来に与える反省があるのだろうか？自分にとつて絵を描くということは、過去と未来に挟まれた己を取り巻くさまざまな出来事に対する自然な反応であり、不完全な上に複雑で矛盾した記憶や想いでさえ、言葉で伝えるよりも奥深く表現出来る方法なのだと思う。

そして、描くという行為は思慮を深めるごとでもあり、何気無い記憶やとりとめのない想い、失われていく過去の物事から新たな発見や見解を与えてくれるものだと思っている。

いつから、私はまだ若いという氣概を持つて日々を暮らし始めただろうか。いつまでも自分は違うという想いは、歳を重ねるごとにズレてきた。気がつけば自分を取り巻く環境も高齢化している。新たな命が誕生し育っていくように、老いた家族の口から、少しずつ現実味を帯びた死という言葉も頻繁に語られるようになつてきた。亡くなつていった自分にとつて大切な人々を想う時、自分が存在する前から、連綿と続いて来た家族というものが存在し、さまざま事を受け継いだ上に今の自分が存在しているという事に今更気づく。今に至る家族の物語が、どこから始まり、どんな未来が待つているのかは分からぬが、命の終わりとともに失われていく個々人が生きて紡いだ歴史の他に、私たちは先代から何を受け継ぎ、そして何を次世代へと渡せるのだろうか。彼等を想い描くことは、生の尊さ、繼承される命、受け継がれていくもの、失われていくものを、改めて考えさせ実感させる行為であり、漠然とした「生きる」ことへの責任を自覚させてくれる戒めにも繋がつてゐる。



積み重ねた私たちの想い  
油彩、シナベニヤ、ポリエステル樹脂  
121.0×168.5cm  
2014年

Coney Island

油彩、シナベニヤ、ポリエスチル樹脂

50.0×41.5cm

2012年



## 中村亮一

1982年 東京都生まれ

2003年 東京造形大学美術学科絵画専攻退学

### 個展

2015年 KOKI ARTS／東京

2013年 ギャラリー椿／東京

2012年 LIXIL ギャラリー Gallery 2／東京

Niche ギャラリー／東京

2011年 第4回 アーティクル賞 ターナーギャラリー／東京

2003年 La Girafa／ベルリン(ドイツ)

### グループ展他

2014年 第17回岡本太郎現代芸術賞展 川崎市岡本太郎美術館／神奈川

2009年 アーティスト イン レジデンス トロント アート スクール／トロント

2006年 Gallery Waschhaus オルタナティブスペース運営(2008年まで)／ベルリン

2004年 "Isst du gerade meinen Tofu?" バックファブリック／ベルリン

## 好奇の光と色に溢れた情景

私は実際に現地に行つた場所の風景を描いている。それは、目を通してみた場所を、私という媒体を通してこの世に留めておきたいと考えるからだ。人が住み、立ち入った記憶が宿っている情景を、現在、過去、そして未来を含め、あらゆる時系列の断面をひとつつの画面に閉じ込めたいと思う好奇心に駆られてしまうのだ。

描かれた場面は、どれも私が実際訪れた土地であり、写真に収めた場面だ。看板が堂々と立つ有名な観光地、そうじやない場所でも人の生死をどうしても考えさせられる。人は恐怖や負の感情というものに惹かれてしまうものだと思う。そこであつた過去の事件、災害、事故といったものが、その土地の強い念のようなものを創作してしまいがちと考える。いわゆる怖いもの見つき。それはきっと、生物として生存するためでもあるし、日本人の性質として忌といふものが強く作用するからでもあると思う。私自身も例外ではなく、過去にあつたものが現在どのような状態であつて、これからどうなる可能性が高いのかを想起させる場所にはよく惹かれててしまうようだ。とはい

つても、過去を廻れば何にもないという土地の方が多い。大小あれども何かしら逸話や言い伝えが残っている。

その場面を、私は極力純色で構成させる。彩度の高い色というものに関心があることと、その色を使用する意義があると考えているからだ。基本的にチューブから出した状態の色を使用し、画面上で異なる色相が隣接している部分のみ融解するように混ぜ合わせる。この色自体も時代性を有意に表すと思っている。例えば赤であればカドミウム、バーミリオン等、目に焼きつく色は重金属が含む物も多く、人間にとつて気軽に入れる物ではなかつた。それが今では顔料純度が下げられ、毒物性を軽減させ、また有機物によつて同じように彩度の高いものが多く存在する。毒性があつたとしても人を魅了し続け使用していた過去、そして今は安全性を考慮しつつ同様の色を求める私達。画材屋で並ぶ多くの絵具の色、それはメーカーが、顧客が求めているだろう色を発売しているわけだから、この時代にこの名前で存在する絵具に、敬意と何とも言えないときめきを感じずにはいられない。

このレポートを執筆する頃、青色LEDを発明した日本人3名がノーベル物理学賞を受賞した。この青色LEDのおかげで、世界の電光掲示板はフルカラーとなり、街の様子、クリスマスのイルミネーションも様変わりした。今までの蛍光灯やネオン管よりも、より長寿命で高輝度になつた。極彩色に飾られた風景の絵は、特に日本では情報過多な社会や、液晶内の仮想世界も連想されるものだが、どちらにせよ人は鮮やかな色に惹かれてしまうものだと思う。

鮮やかな色彩の中で、画面のいたる所に線が入っている。これは各断面を想起させるものとして機能せるものだ。この細線は、極彩色で時系列、位置関係がまどろむ画面の中で、中立する存在、私が外から介入する線である。

なぜ風景を中心には描き残しているかと言えば、あつたという証跡が人の好奇心につながると信じてゐるからだ。むしろ、存在していた記憶が消滅してしまえば、好奇心の芽を摘む不幸なことだと思つてゐることからなのだろう。



渾沌と流れゆく坑道の上  
油彩、アクリル絵具、キャンバス  
130.3×162.0cm  
2014年



What is the reason why our paths cross?

油彩、アクリル絵具、キャンバス

130.3×162.0cm

2012年



## 福田紗也佳

1987年 青森県生まれ

2010年 岩手大学教育学部芸術文化課程卒業

2012年 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻修了

### 個展

2015年 space 2\*3／東京にて10月20日～11月1日迄開催予定

2014年 甘味の後の塩気 ターナーギャラリー／東京

2011年 TWS-EMERGING2011 “Photopsia” トキヨーワンダーサイト本郷／東京

湯本美術展示館／岩手

2010年 \_\_\_\_あ\_\_\_\_ Galerie Moineau／東京

2009年 fuzzy set Gallery la vie／岩手

### グループ展他

2014年 Autumn Group Show Fukagawa bansho gallery／東京

THE ART FAIR +PLUS+ULTRA2014(車洋二／KURUM' ART contemporary) スパイralガーテン／東京('13、'12)

Cyg select Cyg art gallery／岩手

アートフェスタいわて2013 岩手県立美術館／岩手('13)

space 2\*3 オープン記念取り扱い作家小品展 space 2\*3／東京

2013年 剥り出されたイメージ展 Artcomplex Center／東京

GOLDEN COMPETITION 2012 アートコートギャラリー／大阪、ターナーギャラリー／東京

2012年 Magnetic Field Resonance -磁場共鳴- Gallery YUKI-SIS／東京

KURUM' ART contemporary企画 心象／3つの眼差し Gallery YUKI-SIS LABO／東

トキヨーワンダーシード2012 トキヨーワンダーサイト渋谷／東京

2010年 トキヨーワンダーオール公募2010入選作品展 東京都現代美術館／東京

# 升谷真木子

MASUTANI Makiko

## 絵のある場所

絵に描かれた物語は永遠に存在し続け、鑑賞者が作品の前で足を止めた時、その場所も自分自身も物語の世界の中に包み込まれてしまいます。

それは、私の理想とする絵画体験です。描かれている物語は幼い頃の記憶に繋がります。

家の和室には母の鏡台があつて、そこには化粧水や香水の瓶、折りたたまれたスカーフがあり、私は鏡の前に座り、お化粧のふりをするのが好きでした。

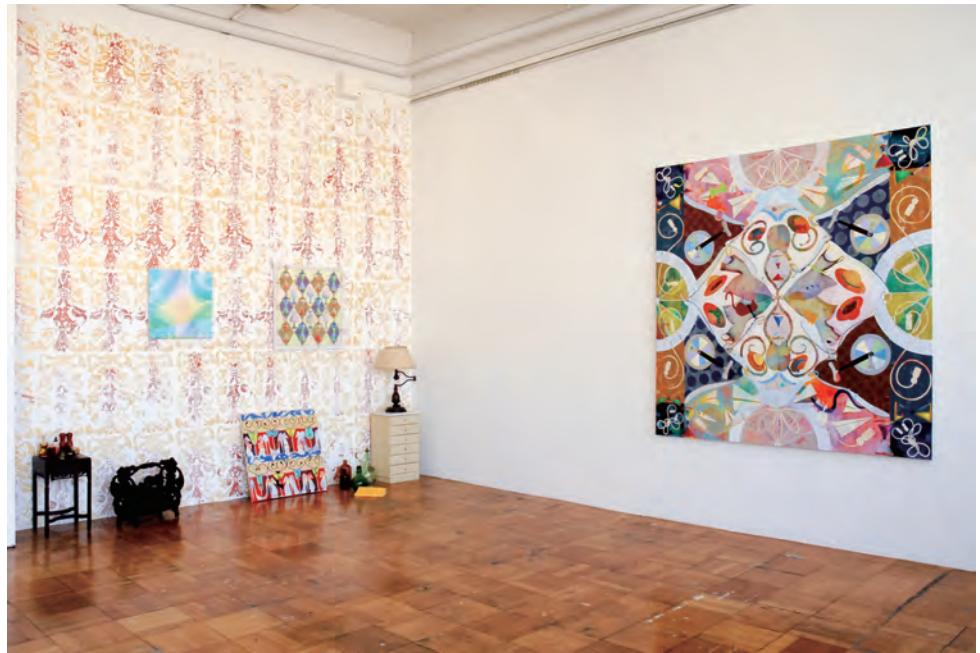
三面鏡を開くと、目の前の鏡に映った香水瓶の形や、化粧箱に施された装飾がどこまでも繰り返される世界を、私はいつまでも眺めていました。

膝の上に広げたスカーフ、障子の向こう側にある日の当たる景色は、いつしか私を取り囲み、心地よい世界が広がっていました。それが私の作りたい作品と鑑賞者との状態によく似ている、「絵のある場所」です。

絵を描くとき、記憶にある空気や香りを形にし、季節の変化や、一日の中の時間の移り変わりで捉えられる感覚を大切にしています。

その感覚を形と色に置き換えて、画面の上に並べて絵にします。

壁に絵をかける時、それまでしまっておいた時間の形、思い出の色たちが目の前に開かれて、今の時間と結び合う場を作りたいと思っています。



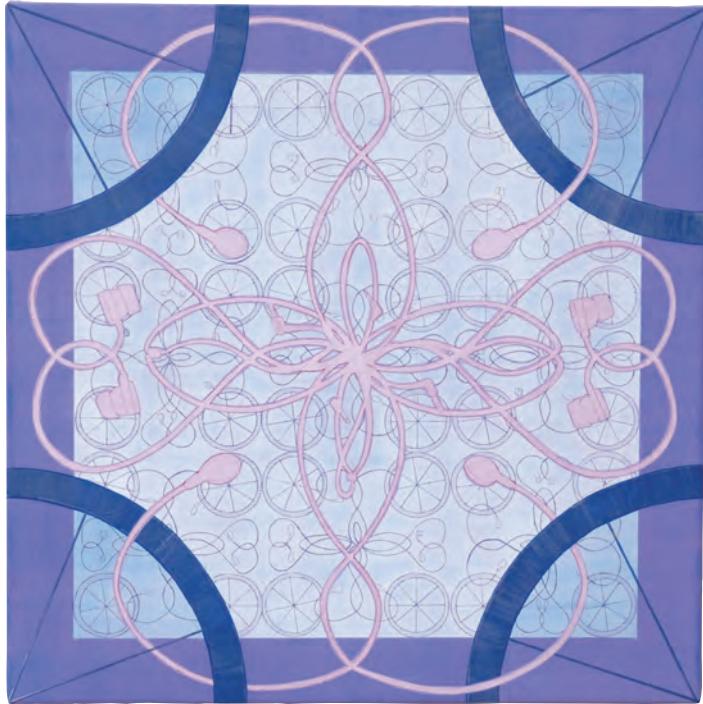
**Installation View**

をちこちの空(画像右側の作品)

アクリル絵具、コットンキャンバス

194.0×194.0cm

2014年



あの風景が聴こえる

アクリル絵具、コットンキャンバス

53.0×53.0cm

2012年



## 升谷真木子

1982年 東京都生まれ

2012年 武藏野美術大学造形学部油絵科油絵専攻卒業

2014年 東京藝術大学大学院美術研究科油画研究領域修了

個展

2012年 続きのはなし Cafe seek／東京

グループ展他

2015年 シュウゴアーツショー ShugoArts／東京

2014年 絵画の輪郭 ShugoArts／東京

2013年 Dアートビエンナーレ ダイテックサカエビル展示場／愛知

Kiss the Heart #2 日本橋三越ショーウィンドウ／東京

2012年 Store Japan～新たなモードの扱い手達 新宿伊勢丹ザ・ステージ／東京  
Art Award Tokyo Marunouchi 行幸地下ギャラリー／東京

## 極上の絵

私は本当に底なしの欲にまみれた満足を知らない女である。おいしいものは一番始めて、腹へこで新鮮なうちにがぶりといくのである。

おいしいものが好き、楽しいことが好き、美しいものが好き、思いつきり何かして、ぐつすり眠りたいのだ。そういう生活が、私と私の絵を支えている。「このときそう思っていた」というような、本当に日常の些細な事や、気分、言葉にしたらたちまち不確かになってしまふようなものたちが私の絵の底に流れている。移ろいがちなエンドアンス。全てが主語の世界観。ふとイメージが生まれる。私は描かずにはいられなくなる。私は絵を描く事で、自由自在となり、自由な世界を見る事ができる。そのときの感覚は、とても神祕に満ちている。絵の具をチューブから出す／絵の具を混色する／描く。そういう感覚はまるで存在しない。それは、その絵の具を出す事が初めから決められていたように／その色を作る為にその色が存在するように／その作品を制作する為に私が存在するように、少し先の未来をずっと見つめているような感覚だ。

制作途中、何時間も絵を見て過ごす。何度も頭の中で手を動かす。この絵がどうなりたいかを聞く為だ。一筆入れたら全てが動き出す。イメージも絵も生き物なのだ。この絵が私に話しかけてくるのならば、この絵は誰とでも話す事が出来るだろう。絵はまるで子供のようだ。絵はひとりでに育っている。私はただそれを見届けるだけなのではないかと思う。初めは荒々しく泣く事しか出来なかつた子供が、いつしか笑い始めると私たちは嬉しくなる。その恐ろしい成長が見たくてアトリエにずっといるのではないかと思う。開かれた中に渦巻く全てのものが私を呼んでいるから、私の絵筆は止まらない。そう、だつて極上に向かうのだから。



## alphabet体操

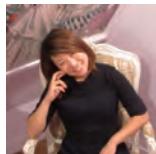
綿布、油彩

227.3×181.8cm

2014年

photo by 木奥惠三

リバイバル上映  
錦布、油彩  
227.3×181.1cm  
2013年  
photo by 城戸 保



## 三井淑香

1984年 愛知県生まれ

2008年 愛知県立芸術大学美術学部油絵科卒業  
2015年 東京藝術大学大学修士課程美術研究科油画専攻修了

個展

2015年 Gallery SIDE 2／東京  
2014年 project N56 三井淑香 東京オペラシティアートギャラリー／東京  
朝の camellia 東京都庁第一本庁舎3階南側空中歩廊／東京  
2007年 chao! 愛知県芸術大学基礎デッサン室／愛知

グループ展他

2015年 SPIN GALLERY SIDE 2／東京  
第18回岡本太郎大賞展 川崎市岡本太郎美術館／神奈川  
2014年 FACE展2014損保ジャパン美術大賞展 損保ジャパン東郷青児美術館／東京  
2013年 トーキョーワンダーオール公募2013入選作品展 東京都現代美術館／東京  
第十回熊谷守一大賞展 アートビア付知交芸プラザ／岐阜  
2012年 culasique. 愛知県立芸術大学学食二階／愛知  
study 01 -drawing- 渋谷画廊／東京  
2010年 That's why we go out to travel. エスバス・デ・ザール・サン・フロンティエール／パリ [フランス]  
2009年 The Girls from Kyoto and Other Japanese Contemporary Artists セントレジスレジデンス／ニューヨーク [アメリカ]  
2008年 JEANSE FACTORY ART AWARD 高知市文化プラザかるぽーと／高知  
2007年 ATELIER展 愛知県市政資料館／愛知  
2004年 my boom is me. エビスアートラボ／愛知

## のびやかにだらしなく

いつの頃からか、立ち並ぶビルに煌びやかな街並みと人々が入り乱れ、空の様子さえ見ることが難しくなつてしまつた今日に私は自らを見失いそうになる。情報が錯綜し、大地は揺れる。不自由のない毎日がより私を退屈にさせる。食べても食べても満腹感を得られないような状態か。恵まれた環境には慣れていないみたいだ。息苦しさを感じるのはこのためか。

私は自身の身体性と幼少期の記憶から、工夫することを要されてきた。とりわけ手に関して抱えてきたものは多いが、何でも器用にこなせるほうだ。幼い頃から『持つ』、『押さえる』、『握る』、『描く』などの行為の様々をまるで遊びを楽しむかのように工夫した。そんな幼き日を思い起こせば、自然と意識は絵画に向かっていたのだと思う。やがて、自分という存在を意識するためには手という存在が不可欠になつた。

良いことも悪いことも手はすべてを見ていた。意識と無意識の中に渦巻く言葉でできない違和感を拭い切ろうとすればするほど、描いて、描いて、描き殴つて、色を乗せては消し、再び描き続けていく。それが私のできる唯一の無言の抵抗と葛藤。そして、同時に巻き起こる喜びという快感。吐き出してしまえば、その先の何かに近づけるかもしれない。溢れ出る不可解な線や色、形象はいつでも正直だ。

今もなお、私はしつこく手を動かすことにはこだわり続けている。自分を表現する最大級の方法がこれしかなかつた、これしかできなかつたからだ。やがて行為は絵画として意味を持ち、私はそこにすべて託す。めいづぱい息を吸えるように。満腹感を得られるようだ。

手はジレンマではない。むしろ大きな武器だ。のびやかにだらしなく、誰からも染められてしまわぬよう純粹な、ありのままの、自分が自分であるための絵画を。そしてそれらがもたらす社会的影響や真実をこの目で見届けるために描く。

線は躍動感に溢れ、空間を旅する。色彩は

呼応し発する。手のほてりと震えは無意識の感覚をいくつも紡いでいくのだ。

いつまでも完成しないように、あるいは完成したくないようには描かれる開放的な表現、完成を拒否するその自由闊達な画法はゴヤ風にいうと『ロス カプリチヨス』気のむくままに精神のいかにも現代的な表現にほかならない。

本当の自分と出逢えた。窮屈な世の中が早く終わりますように、願いを込めて。そんなことを考えながら、私は今日も描き続けていく。



のびやかにだらしなく  
パネル、綿布、紙粘土、  
アクリル絵具、透明水彩、クレヨン  
181.8×227.3cm  
2013年



舌をかむ  
パネル、綿布、紙粘土、  
アクリル絵具、オイルペイント  
29.8×42.0cm  
2015年



## 森 綾乃

1990年 大阪府生まれ

2012年 大阪芸術大学芸術学部美術学科油画コース卒業  
2014年 多摩美術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画領域修了

個展

2015年 ギャラリー風／大阪にて 7月7日～15日迄開催予定  
2014年 森綾乃展 MORI Ayano「解放される場所」 ギャルリー東京ユマニテ bis／東京

グループ展他

2015年 VOCA展2015 現代美術の展望－新しい平面の作家たち 上野の森美術館／東京  
2014年 99人展 サム・ホール・コミュニケーション展 Gallery Q／東京  
2013年 ON PAPER2013紙と自然 展－タイ国立・シラバコーン大学 多摩美術大学  
国際交流プロジェクト－ 多摩美術大学美術館／東京  
2012年 Expected Artists 2012 Shonandai MY Gallery／東京

## 絵を描くことについて

私は23歳で絵を描き始めました。一般の大学を卒業して商品先物取引の会社に就職しましたが、半年で倒産してしまいました。次に何をしようかと考えていた時に、小さい頃から好きだった絵を描いていきたいと思うようになりました。美術の専門学校に入つて作家を志すようになりました。専門学校では鉛筆の削り方から教わり、始めた頃は、描きたいものと実際描いたもの間に大きな差がありました。ここ1年くらいで大分差が縮まってきたような気がします。制作は平日は1~2時間くらいで、休日は6~8時間くらいのペースで描いています。

私の制作方法は、コラージュ的手法で進めています。まず背景から決めていく場合が多く、次に人物や動物、道具などを配置していきます。素材は雑誌やインターネットから探してきます。背景に対して合います。そのまますぎず、微妙な違和感を与えるような素材を採用します。大きさや位置などを修正していくながら作品にしていきます。エスキースは作らず、直接キャンバスにアクリル絵具で描いていきます。イメ

ージが出来上がるまで何度も書き直すので、画面は厚塗りになってしまいます。インターネットなどから素材を探す理由は、既に世の中には大量のイメージが溢れているので、新たに生み出す必要がないからです。今ある素材を組み合わせることで、新しいものは生み出しができると思っています。

コンセプトは何枚か描いていくうちに、自然と浮かび上がってきたものを考察し採用しています。近年では、ストレスを可視化するというコンセプトで作品を制作しています。現代はストレス社会ともいわれ、多くの人がストレスを抱えてながら生活しています。私も会社員時代は、強いストレスを感じながら仕事をしていました。

ストレスとは生物学的に、何らかの刺激によって生体に生じた歪みの状態を意味しています。その歪みは、例えば人々が見る夢の中で、無意識のうちに具体的な形となつて現れて来ることがあります。私はストレスの原因となる歪みを、私なりに解釈して絵にしたいと考えています。

私は絵を描くことで、自分自身の無意識の部分だつたり、未知の部分を知ることができればいいと思っています。今後も、その時に自分が面白いと思ったものを描き、自分の内なる衝動を大切にしながら制作していくこうと思います。



報道  
アクリル絵具、キャンバス  
116.7×91.0cm  
2015年

学者  
アクリル絵具、キャンバス  
116.7×91.0cm  
2013年



## ユアサエボシ

1983年 千葉県生まれ

2005年 東洋大学経済学部卒業  
2008年 東洋美術学校絵画科卒業

### 個展

2014年 TWS-Emerging/Newspaper collage project トキヨーワンダーサイト渋谷／東京  
2013年 ユアサエボシ展 Hidari Zingaro／東京

### グループ展他

2014年 3331千代田芸術祭2014 3331アーツ千代田／東京  
2013年 シエル美術賞2013 国立新美術館／東京  
GEISAI#19 都立産業貿易センター台東館／東京  
ASIANAGEⅢ展 アートコンプレックスセンター／東京  
第9回世界絵画大賞展 東京都美術館／東京  
トキヨーワンダーウォール2013 東京都現代美術館／東京  
第9回タグボードアワード 世田谷ものづくり学校／東京  
第28回ホルベイン・スカラシップ奨学生  
GEISAI#19 ガブリエル・リッター賞  
第9回世界絵画大賞展 協賛社賞  
第8回タグボードアワード 青山悟賞  
2012年 第9回西脇市サムホール大賞展 西脇市岡之上美術館／兵庫

# 吉岡千尋

YOSHIOKA Chihiro

## つたわらなさの構築

「学年は九月一日に始まつた。」夏目漱石の小説『三四郎』で、主人公は通い始めた大学の建物の配置や構造を考察している。まるで絵に描けそうに明解な文章の魅力を感じながら、なんとなく手を付けられず、書き始めたのは、小説を読んで数年経つてからだつた。3・11以降、届かない情報と、止めどなく流れる映像の中で、私たちはこれからどうなつていくのだろうと感じながら、情報を共有する事の難しさに困惑していた。

小説から描いてみると、言葉の生み出すべしの予想以上の曖昧さに驚き、言葉や行間は親和性のある膜に包まれ、美しい色になつて浮遊した。

時を経て、紅葉がとても美しく感じる年があり、ある日の午後、青空に映える蝶質なオレンジに惹かれながら、行く坂道を登り、建物でその姿が隠れて見えなくなるまで、時々立ち止まりながら紅葉を見送つた。そして似たような感覚を思い出した。

それは10年前の春、アルハンブラ宮殿の『二姉妹の間』で、内省的な光に包まれた時のことだ。天井装飾ムカルナスを仰ぎ見ては、

その構造と装飾を把握しきれず、疲れて足元に視線を落とした。ぐつと顎をあげると勝手に空気が入つて、胸が一杯になり、苦しくなる。眼が見ている反対方向に引っ張られるような後頭部の重み。息を吐きながら頭をもたげると、軽い眩暈を感じるから、治まるまで待つた。仰観に添う身体の経験。印象的な光景は、瞬間にしか訪れない。だから、出来ることなら執拗に反芻し、画面に定着させたくなる。こうしてどこまでも青い空は、透けた葉の厚みの分だけ私の内側に引っ張られ、色の厚みとして画面に定着した。

何度も繰り返し読まれる小説も、毎年廻る風景も、自分の身体を通して体験する時は刹那的で伝わらなさを含む。『三四郎』では漱石は、小説内の地理を読者に思い描かせるかのように、異なる時間と角度から、主人公に何度も同じ場所を眺めさせる。伝わらない空間は読者の中ではんやりと補われるのである。

私が絵を描く時も、伝わらなさの含まれた空間を描写する事で、絵の前に立つ人と、どんな風に関わる事ができるのか試して行きたい。

私が絵を描く時も、伝わらなさの含まれた空間を描写する事で、絵の前に立つ人と、どんな風に関わる事ができるのか試して行きたい。



小説の建築3  
油彩、白亜地、寒冷紗、パネル  
29.9×21.2cm  
2013年



小説の建築1  
油彩、金属粉、白亜地、寒冷紗、パネル  
29.9×21.2cm  
2013年



## 吉岡千尋

1981年 京都府生まれ

2006年 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了

### 個展

- 2016年 吉岡千尋個展 アートスペース虹／京都にて2月9日～21日迄開催予定  
2014年 mugarnas アートスペース虹／京都  
2013年 一幕の絵、小説の建築 アートスペース虹／京都  
2012年 skannata ART COURT Gallery／大阪  
2010年 非在の庭 Part2吉岡千尋展 ガラスのライオン アートスペース虹／京都  
2008年 吉岡千尋展 Oギャラリー=eyes／大阪('07)  
2007年 吉岡千尋展 Oギャラリー-up,s／東京

### グループ展他

- 2015年 Studio Exhibit 2015 ウズイチスタジオ／京都  
麝香の匂い TALION GALLERY／東京  
琳派400年記念 新鋭選抜展～琳派の伝統から、RIMPAの想像へ～ 京都文化博物館／京都  
平成26年度境谷小学校作品展 京都市立境谷小学校／京都 ('12 '13 '14)  
2014年 ACG eyes 6：吉岡千尋、宮田雪乃、笠間弥路－二次元地層学 ART COURT Gallery／大阪  
京都府美術工芸新銳展～京都国際現代芸術祭2015への道～ 京都文化博物館／京都  
2013年 「TSCA Rough Consensus」展 ホテル アンテルーム 京都／京都  
京芸 Transmit Program #04 KYOTO STUDIO 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA／京都  
2011年 歌とピクニック in Tamba うぐいすの森／兵庫  
gradation 2kw gallery／大阪  
2010年 オープンスタジオuzumasa ウズイチstudio／京都  
Art Camp 2010 Gallery Yamaguchi kunst-bau／大阪  
2009年 feat.hunctorama salon show Muzz Program Space／京都  
Truth of the Multilayer 同時代ギャラリー／京都  
VOCA展2009 現代美術の展望-新しい平面の作家たち 上野の森美術館／東京  
佐々田南緒 | 吉岡千尋 sowaka／京都  
4つのアトリエ ウズイチstudio／京都  
FIX展 元立誠小学校／京都

## 現実逃避の刹那から生まれるもの

私の制作の元になっているのは頭の中に思い描く、動くイメージである。そのイメージは、ロックやエレクトロニカ等の音楽を聞いている時に想像する、一曲の初めから最後までの流れに合わせて動く、短編映画のようなものだ。それは聞いている音楽の世界や歌詞とは関係のないものであるが、架空のストーリー、人物や街が次々と現れ、普段の自分の感覚から解放される時間である。その刹那を、永続的な形式に閉じこめたいという強い思いが、絵を描くモチベーションになっている。

制作のプロセスは、まず自分で描いた映画のコンテのようなものから惹かれる瞬間を選び、次にそれを大きな画面に描き起こすというものだ。そのようにアウトプットしたものを見た上でもう一度音楽と共に想像すると、絵にする前とは少し違ったイメージが浮かび上がる。想像とアウトプットを繰り返すことで、そこに相互作用のエネルギーが生まれる。そこから頭の中のものを超えたものを描くことができ、それが作品になるのではないかと思う。

また設定の新たな方法として、登場人物をマネキンを加工し再現したものと、場面設定のために写真を加工した小さなマケットを使い、絵コンテに従って動画を撮影することを始めている。カメラを通して見つて急に現実感を帯びることは新たな発見であり、その映像を自由に再生したり停止したりすることで、感情に流されずに見たいものを突き詰めることができる。この動画をとるプロセスを挟むことで、操作と検証が可能なものとなり、描くという行為そのものに集中できるようになつた。

このような試みをしながら、三年前から続けているこのテーマをこれからも続けていく。短編映画のようないくつもの連続したイメージから時間をかけて一枚一枚絵にしていくことは、自分の中の世界を少しづつ完成させていくような感覚である。その一枚一枚を並べて展示した時、自分の頭の中だけにあつた世界は、見る人によって別のストーリーを想起させ、新たな広がりを見せるようになる。

ンシーンを見るような感覚で、連続した動くイメージの一瞬が切り取られた緊張感や流動感、又私が現実逃避の時に感じる、現実と切り離され没頭するような感覚を味わつて欲しい。

そしてその見る人の中には、今とは違う感情を持ち違う空想をしているかもしれない、未来の私も含まれている。



FL.stay 14  
アクリル絵具  
72.0×126.0cm  
2015年



U room 3  
アクリル絵具  
53.5×73.0cm  
2013年



## 吉田桃子

1989年 兵庫県生まれ

2014年 京都市立芸術大学卒業

2015年 京都市立芸術大学大学院在学中

個展

2013年 U room 京都市立芸術大学内小ギャラリー／京都

グループ展他

2015年 アトリエKAI OB展 原田の森ギャラリー／兵庫（神戸）にて8月25日～30日迄開催予定

作品中！2015 galerie 16／京都

2013年 リキテックスアートプライズ2013 3331 Arts Chiyoda／東京

<http://rainbow-picha.jimdo.com>

# The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊2015

発行日 2015年7月1日発行  
定 価 1,000円(本体価格)  
発行所 ホルペイン工業株式会社  
東京都豊島区東池袋2-18-4  
発行人 川見良夫  
編 集 初鹿野雄起







